

流れ星に願いを込めて

クリマタクト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラキュースの魔剣の力が解放されちゃったお話です（大嘘）

目次

5話	4話	3話	2話	1話	プロローグ
60	45	30	23	14	1

プロローグ

「……よし、これでいいわね」

ラクキュースは一人、ノートを備え付けの机の二段底に入れながら満足げに言う。

本来、ただの日記などであればこんなに嚴重に保管などしないが、その内容は自らの呪いに関するもので、誰にだろうと言えたものではなかった。

ラクキュースは立ち上がり、長時間座って固まった自分の体をほぐす為に軽くストレッチをしている時ふと、立てかけてある魔剣を見た。

——魔剣キリネイラム

かの13英雄が一人、黒騎士の使っていたとされる4本のうちの一本。

これを見つけたときは狂喜乱舞して、みんなからは呆れられるほどだった。

(あの時は本当に嬉しかった)

(でも、今はなあ……)

当然、今でもラクキュースにとってあの日の出来事は嬉しかったし忘れられない思い出だ。だが、いまのラクキュースにはそれ以外の気持ちもあつた。

ラクキュースは魔剣を持ちながら、軽く素振りをする。普通の一人用の宿ならそんなこと危なくて到底出来たもんじゃないが、ここは王都一の宿。その程度のことできない広さではない。

ラクキュースの素振りはとても鋭く、そして力強い。筋力的に言えば、今のパーティでガガーランの次くらいの物を持っていると言えるだろう。普通の冒険者や兵士であれば、理想として目指すような素振り。だが、それをするラクキュースの顔は晴れるどころか曇っていた。

(……やっぱり、かあ)

速度も筋力もある。だが、ラクキュースの顔が晴れることはない。それはなぜか？——目指すものが違うからだ。

ラクユースは英雄になりたかった。

誰にも負けない。誰よりも強い。御伽噺に出てくるような英雄に、ラクユースはなりたかった。

だが、その思いもラクユースの中では消えようとしていた。

届かないのだ。技が届かない。気持ちが届かない。強さが届かない。

誰もが思い、焦がれるような英雄に、その基準に、ラクユースの中では届いていなかった。

他の人からしてみれば、十分に届いていると言えるが、ラクユース本人からすればまだまだだ。

——自分よりも……

そこまで考えて頭を振る。

「少し弱気になってたわね……」

ラクユースは一人、そうごちた後寝台へと向かう。この考えはしてはいけないもの。そう結論づけて考えを無理やり絶つ。

(自分にはないものはたくさんある。でも、それでいい……みんなと一緒に冒険できるなら。それだけで私は満たされる)

——流れ星が光った。

◆?

「うーむ……確かここにあつたはずなんだがなあ……」

甲冑を纏った半魔巨人の異形種である、武人武御雷は周りにいるNPCには目もくれずにそこに保管してあるアイテムを漁っていた。

ナザリック5階層に存在する大雪玉。そこは領域守護者であるコキユートスの住処だが、NPCの親も物を置いても問題ないだろうか？ という謎理論により武人武御雷の荷物もそれなりに置かれていた。もつとも、重要なものは宝物庫にしまつてあるので、ここにあるものは基本的に少ない。だが、今の武人武御雷の探すものはそこにあつた。

「よし、できたできた」

目の前にいたのは、武者だった。

兜をかぶり、具足を嵌めた姿は現実でも太古の昔に名を馳せたとい

われている伝説のSAMURAIの姿そのものだった。

「そうそうこれこれ、やっぱりかっこいいなー!」

うんうんと頷きながら、いろいろな角度からSSを取って一通り満足することができた武人武御雷は、まるで自分が来ていることを隠すかの様に後片付けを始めた。

そして少しの時間の後、整理を終わらせた彼はさっさとメニューを開いて、お目当てのものを装備する。

コレをすれば、もうここに来ることはない。

そう思うと、彼の中にある思いがポツリと声になった。

「何で、引退したんですか……たっち・みーさん。俺、あなたに勝ちたかったんですよ」

その一言には様々な感情が込められていた。

不満、無念、悲しみ、そして憧憬。

彼は勝ちたかったのだ。ただの一回だけでもいい。あの、アルフヘイム最強の戦士をこの手で下したかった。

たかがゲーム。そう思っただけで割り切れることもできた。と言うより、引退すると聞かされた時はそう自分の中で割り切れることは出来た。

でも、その後になってやっとな実感が湧いて来たのか沸々と怒りにも似た、後悔にも似た理不尽と言える様な感情が溢れ出したのだ。

その後は、段々とログインする日にちが開いていった。仕事が忙しいから仕方ない。彼女が出来たから時間がない。そんな風に、仕方ない理由で自分を言い聞かせて来た。

だが、それも今日で終わりだ。

このゲームも、今日を最後にサービスを終了する。

「モモンガさんには悪いことしたかなあ」

本来、ギルメンがギルド内にリスポする時はギルドチャットで通知が行くが、今はこっそり来たかったため通知機能を切っているし、ギルドの機能で発見されない様に特殊機能も使っている。

自分が抜けた後も、淡々とギルドを維持して来たモモンガに会う顔が無い。そう思っていたのだ。

——最もその本人はそんな事微塵にも思わずに大歓迎するだろう

が。

彼は立ち上がり、装着された指輪をチラリと見る。

流れ星の指輪。引退すると言ってきたやまいこさんに、ビール一本と交換してもらった逸品。残っている祈りの回数是一回。

コキュートスに向かい、大きく腕を上げて叫ぶ。

「指輪よ！我が願いを叶えたまえ!!」

指輪は超位魔法を発動させる。

そして10個ほどの選択肢を目の前に映し出した。

その中に一つ、彼の望んだ選択肢がある。

『神への嘆願』

サービス終了が発表された後、運営が星に願いをを発動させた時選択肢に確定で入る様になった物。

その内容は名前の通り、運営に対して音声メッセージを送れるまさに神への嘆願だった。とはいえ、世界級アイテムよこせやレベルキヤップ開放しろなんてものはまず叶えてくれない。運が良ければ叶えてくれるかもしれない。その程度の物だ。だが、それで十分だった。

彼はコキュートスに向かい言い放つ。

「——こいつを……コキュートスを誰よりも強くしてくれ。たちちみーを超えるくらい、ずっと、ずっと!」

自分の無念、悔恨。その全てを含めた願い。それを言い放ったと同時に魔法陣は消え去った。その後、急いでステータス画面を見るが変化なし。明らかに失敗に終わっていた。

彼には分かっていたことだ。いくらクソ運営だとしても、こんな願いを叶えてくれるはずがない。第一、叶えるにしたらってどうすればいいんだ。強さの定義は何だ。腕力？技術？そんなの誰にもわからない。

だが彼はこれ以上に無いくらいに清々していた。

「うん。これでいい。少しはスカッとした」

ゲーム的な意味では何も意味の無いことだった。

ただ一回、貴重なアイテムを空撃ちしただけに過ぎないものだった。

た。

だが、彼にとつてはこれ以上に価値のある行動なんて今、この場にあるわけが無かった。

「だから……もう、終わりだ」

どこかすつきりしたような雰囲気を帯びる彼はそう言いながら去っていく。

サービス終了、30分前の出来事。

彼の存在に気付いているものは一蟲を除いて居ない。

◆?

「ふう」

冴えない風貌の男は、ヘッドギアを外した後大きく伸びをする。

仕事のせいで全く使ってなかったナノマシンを半年ぶりくらいにフル稼働させたせいか、体の調子が少し悪いのだろう。

「——さん、ご飯食べないの?」

「ああ、もう食べるよ」

そう言いながら男は、ヘッドギアをもと入れてあつた埃まみれの箱の中に入れて歩きます。

——外では珍しく流れ星が光っていた。

◆?

「あ——」

淑女とはとてもでは無いが言えない様な声を上げながら起き上がる。

外を見れば、既に通りが活気付いている。もう直ぐで昼時の時間だ。

「……流石に寝すぎたわね」

昨日の愚痴が心の中では思いのほか引きずっていたのか? 全く情けない。

そう反省しながら、脇に置いてある水差しを軽く煽りつつ、着替え始める。

ネグリジエを脱いで、脇に置いてある服を着込んで行く。

その行動はなれたもので鎧を着けるのですらすぐに終わる。

そして最後に、剣に手をかけた瞬間——『ム？』

「……え？」

ラキユースは直ぐに剣を手放し、後ろに下がる。

「……剣が喋った？」

恐る恐る、もう一度剣に触る。反応がない。柄を握る感触も、剣の重さもいつもと変わらない。さっきのは聞き間違いだったのか？ そうラキユースは思った。

（そうよ、何も無い。多分誰かが伝言メッセージを間違えて送ってきただけよ。そうに違いないわ）

そもそも、剣が喋るなんておかしい事なのだ。そんな事を考えるやつなんているわけが無い。いたらただのアホだ。

そんな風に、自分の奇病を棚に上げながらラキユースは結論つけて魔剣を腰に付ける。

その際に先ほどの様な反応はやっぱり無かった。

（やっぱり疲れてるのかなあ……みんなには悪いけど一日寝てようか——）

『——オイ、キコエテイルノダロウ？』

少し片言だが、威圧のある声が彼女の頭の中に響く。

聞こえてません。

そう言いたいラキユースだった。

だが、相手が気付いている以上此方も応えないといけない。と言うより長年の勘か、ここで無視をすることもっと酷いことになる気がする。

そんな自分の勘を信じながらラキユースは、剣に向かい話し始めた。

「……聞こえてるわ」

『ナラ答エロ。ココハドコダ？』

「リ・エステイーズ王国の王都よ」

『ナザリック地下大墳墓デハ無イノカ？』

「……そんな名前の場所私は聞いたことないわ」

『……』

ラキユースの答えに魔剣は沈黙する。

そうすると逆にラキユースがなるべく刺激しないよう、ゆつくりと質問をする。

「じゃあ次は私から。貴方の名前を教えてください」

『……』

「あれ？」

「おい、ねえ？、話聞けよ。そんな風に何度呼び掛けても反応がない。それどころか、先ほどまでの高圧的な気配も消え失せている。」

ラキユースは少し焦りながらもつと呼び掛けたり、魔剣を叩いたりする。しかし何も反応はない。

「二つ人格があるみたいでカツコイイからいて欲しかったけど……もしかしたら、魔剣にあつた持ち主の残滓だったのかしら？」

聞いたことはある。一部の武器は、持ち主が死んだ時蘇生ができるように、魂を自分の中に保管することを。ラキユースはこの魔剣もその類だったのではないか？馬鹿らしい話ではあるが、これは十三英雄のつけていた魔剣のひとつ。そんなことがあつてもおかしくない。そう結論づけて、みんなの所に行こうとするが強烈な違和感。

体が動かない。

(……は?)

「フム、私デモ動力セルノカ」

(……ちよ!?)

どんなに体を動かそうとしてもまるで動く気配はない。自分の命令を体が一つ聞いてくれないのだ。

ラキユース(偽)はそのままドアに手をかけて外に出る。

その間ラキユースは全力で抵抗するが、そんなの意にも返さずズンズンと突き進んで行く。

(止まってー!)

心は強情でも体は素直。

どんなに気合を入れて体を動かそうとしても、体が言うことを聞いてくれない。止まるどころか、ズンズンと突き進んで行き、ついには一階の酒場の場所になってしまう。

そこにはイビルアイが一人で座っていた。

「やつと起きたかラクユース」

（助けてイビルアイ！）

「……」

ラクユースの叫びは当然のことながら目の前で本を読んでいるイビルアイに届くことはない。

だが、こちらにまったく反応を示さないラクユースを不審に思ったのか首をかしげていた。

「どうした？聞こえてないのか？」

「……イヤ、キコエテイル」

「ならどうした、体調でも崩したのか？見たところ喋るのもつらいように見える」

「ソクナコトハナイ。少シ用事ガデキタ。イマカラデルガ気ニスルナ」

「そ、そうか？」

（そんなわけないでしょー!?!）

ラクユース渾身の叫びはなおも届かず。ただ体調が悪いだけと思っ込んでいるイビルアイは、今のラクユースにまったく違和感を覚えていない。

（フム、ウマクイツタミタイダナ）

自分が大根役者なのを自覚しているラクユース（偽）は上手くことが進んでいることに一息つく。

このまま今の場所さえ離れてしまえば、とりあえず周りと離れることができる。そして、そうすれば栄えあるナザリックを見つけないこともたやすい。そう考えながら、扉に手をかけようとするがそのとき後ろから声をかけられる。

「な、なあラクユース。本当に大丈夫なのか？」

話しかけてきたのはまたもイビルアイ。つつけんどんな態度をとられたとしても、それを意に返さずにもう一回話しかけてくる。どこぞの竜王が見たらちよろいと言いなながら大笑いするのが間違いない光景だ。

ラクキュース（偽）は少しわずらわしく思うが、それでもここであれば今の努力がすべて水の泡。ぐつとこらえてなんでもないような態度で話し出す。

「……大丈夫だ。ジャア、マタ後デ——」

「——おつ、やっと起きたのかラクキュース」

「リーダーやっと起きた」

「昨夜はお楽しみでしたね」

「お前たち、もう戻ったのか」

「ああ、指名の依頼が今日来てたらしくてな。探す手間が省けたよ」

ラクキュース（偽）がようやく出れると思った矢先に、双子の忍者と大柄な体格をした女？がこちらに向かって話しかけてきた。

これにはラクキュース（偽）はこれまで以上の危機感を覚えた。

先ほどまでは騙せばいい対象が少女一人だったが、今は三人に増えている。どう動くべきか。そう考える途中にも、目の前では会話が続けている。

「——ということ、ラクキュースはどこかに行くらしいぞ」

「ん？なんか用事があったのか」

「アア、少シ野暮用ガナ」

「ふーん」

ガガーランはラクキュースに向けて懐疑の視線を送ってくるが、それはまだ怪しんでいるだけで問いただしてくるほどのものではなかった。

「デハナ、夜二戻ツテコナクテモ気ニシナ——」

「ねえねえ、鬼ボス」

「ム、何ダツ!？」

忍者の片割れに向かい振り返るとほぼ同時のタイミングで、逆側にいた方からクナイをラクキュースめがけて投げられていた。

ラクキュース（偽）はそれを鎧の腕部分で反射的にはじく。一体どうしたんだ？そう問おうとするが、相手はすでに臨戦態勢。聞く耳を持っていない。

「……一体ドウシタ？」

「ボスが鬼ボスって言われたら必ず怒る」

「それにいつもに比べて姿勢が、声が、呼吸が全く違っていた。ボスはどこ？」

（あ、あなたたち）

「お、おい。それは本当か!？」

アダマタイト級の戦闘ということですのでに大半が逃げだした空間の中、半信半疑な者はいれど全員ラクユースに向けて剣を向けていた。

出入口の方向に最低でも一人はいる関係から離脱することも難しい。

そう思ったラクユース（偽）は腰に掛けていた剣を握る。

「フム、ナラバ切り伏セル」

「やってみろお！」

ガガーランは戦鎚——尖ってない方——をラクユースの胴めがけて殴りつける。

未熟な者であれば受けるどころか避けることすらできないアダマタイト級にふさわしい豪快な一撃。

しかし、ラクユースはそれをたやすく剣で受け止めた。

「なっ!？」

「どけガガーラン！砂の領域・対個！」

返す刀で首をはねようとガガーランに近づくラクユースに対してサンドファイールド・ワン砂の領域・対個が発動。

周辺が砂地となったことで一瞬だけ足をとられるラクユース。その隙を決して逃がさず、ティアとティナは十字に位置取りクナイを同時に投げってくる。

しかし、これもラクユースは身じろぎする程度の最低限度の動きで回避。薄皮一枚傷ついていない。

ラクユースは即座にティナに向かい横なぎの斬撃を放つ。その鋭い一閃はティナの胴体を薙ぐが、それに手ごたえは全くなかった。

「影分身ノ術カ」

「情報は持つてゐるって思つてよさそう」

「しかも強い。鬼リーダーよりも強い」

「……おそらく、私と同格の力はあるな」

「こりゃあ……」

完璧な連携攻撃だったにもかかわらず、完璧に迎撃をして見せるラキユースにこれ以上のない警戒を示していた。

(ねえ！いい加減やめなさいよ！私の仲間になんてことするのよ!!)

「黙レ。私二ハ奴ラノヨウナ仲間ハイナイ」

「……もしかしてあのしゃべり方。本物のラキユースが中に!？」

「なるほど読めてきたぞ。あれは魔剣の呪いだっただのか」

「くそ……ラキユースめ、ムチャしやがって」

「……ボスは絶対に取り戻す」

「それが今までボスの言葉を信じて何もしてなかった、私たちのやるべきこと」

全員の顔に決死の覚悟が浮かぶ。だがそれを気にするラキユース(偽)ではない。

正眼に剣を構える。だが、その動きには少しだけ違和感が残っていた。

(何時モト感覚が違ウ……マルデ泥ノ中ニイルヨウダ)

本来、ラキユース(偽)はこんなに遅い動きでは無い。元の状態で踏み込めば足元の砂など無視して突っ込めるし、ガガーランの戦槌を受け止めた後カウンターで首を跳ねることも出来ただろう。

だが、いまそれをしようとしても体が反応をしてきていなかったのだ。

だから今の純粋な実力はこちらで言うところの難度180程度。元と比べると雲泥の差だ。

「私が抑える！その隙に気絶でもさせろ！」

「おう」

(何トイウ屈辱。至高ノ御方々ヨリ賜リシオカスラ、私ハ十全ニ振ルウコトスラ出来ナイノカ……)

イビルアイは得意の結晶散弾シヤード・バックショットを放つ。

大量の水晶を相手にぶつけるこの魔法。いかにラキユースといえ

どこの近距離からよけられるはずはない。そう全員が確信する中、ラキユースは信じられない行動に出る。

(ねえーやめて！何しようとしてるのよ!?)

(ナラバセメテ、コノ者タチヲ狩ル事デ我ガ絶対的ナ支配者ニ勝利ヲ献上シヨウ)

水晶の弾の群れが当たる数秒前、ラキユースは神速ともいえる速度で魔剣を構える。

——そして振るった。

「——風斬」

瞬間、辺り一体に強烈な風が奔る。

迫ってきた水晶はあらぬ方向に吹っ飛び、横から向かってきていたガガーランやティア、ティナも思わず顔を覆ってしまい、前に進むことができない。

そしてラキユースの目の前にいたイビルアイはその衝撃に、壁まで吹っ飛ばされていた。

「ぐうッ！」

「イビルアイ！」

だがもう遅い。

全員が止まったがゆえにできた一瞬の隙。

それを見逃すラキユース(偽)ではなかった。

「マズハ一人」

ティアとティナから明らかに急所狙いなクナイが投げられるが、その程度では止まらない。

最小限の動きでよけながら、壁までの距離を一步で詰めたラキユースは、大きく魔剣を振りかぶる。

絶対的な力の前で、片足が折れたイビルアイは動けずにいた。

だが、せめて一矢報いてやるとでも言うように、杖の先に魔法が灯っている。しかし、今のラキユースの技量を考えれば相打ちがいいところ。魔法を当てたところで、イビルアイの死は免れない。

だがイビルアイにしてみれば、それでよかった。

(私の命で、ラキユースを正気に戻せるのならそれでいい)

若い者を守るために、年老いたものは死ぬべきなのだろう。そんなふうに見えるながら、イビルアイは一言。ラクキュースに向けて言う。

「後は任せた」

「イビルアイ！」

「よけて！」

「ッ!!」

そして、大上段の一撃はそのままイビルアイめがけて振り落とされる——はずだった。

間違いない即死級の攻撃だったそれは、イビルアイの仮面に触れるか触れないかといったところでぎりぎりどまっている。

イビルアイが顔を上げると、そこには苦渋に満ちた顔のラクキュースがいた。

「絶対……そんなこと、させない………ッ!!」

（クッ!? 動力セナイ!!）

「ティア！」

「任せて！」

ラクキュースが必死になって作ってくれた隙。それを見逃さずにティアはラクキュースにひとつのポジションをぶん投げた。

指一本動けないラクキュースはその中の液体をもろに浴び、変な酩酊感に襲われた。

（コレ………ハ？）

「即効性の麻痺毒よ。抵抗する気はないから一緒に眠りなさい！」

（クッ!!）

段々と苦渋の顔が消えていき、落ち着いた顔になっていく。

（だめね、もう動きそうにない）

麻痺毒が完全に回ってぼやけていく視界の中、他人事のようにラクキュースはそう思っていた。

「お、おい！しっかりしろ！のつとられるなよ!!」

「大丈夫よ。でも、拘束はお願いね？」

そこで、ラクキュースの視界は真っ暗になった。

1話

気がつけば、私は氷の宮殿の中にいた。

その中身は豪華絢爛。まるでこの世の贅沢を寄せ集めたような場所だった。

遠目で眺めているだけでも楽しませてくれる。

それを私はずっと見ていた。

ずっと。

ずっと。

——動くことができないのだから。

◆？

「……ッ!!」

ラキユースは呼吸を荒くしながら、跳ね上がるように起き上がろうとするが、鎖に邪魔されて動けない。右腕は特に動く気配がない。まるで上から押さえつけられているかのように、ピクリとも動かない。

それを不審に思い、右腕を見る。

するとその腕には、魔剣が握られていた。

(ヨウヤク目覚メタカ)

「……!!あなたがやったの?」

衝撃から立ち上がれてないラキユースに、まるで間髪を入れないように魔剣は話しかけた。

ラキユースの質問に、魔剣は此方を少し馬鹿にするように応え始める。

(アア。コノママ捨テラレルノハ、些方面倒ナノデナ)

「……そうですか」

傍目から見れば、魔剣を握りしめているように見える。しかしラキユースからすれば、握りしめて持つていているという感覚はなかった。例えるのであれば、布を手に巻きつけているようなもの。何かが手にある感覚はあれど、力を全く入れてない。そんな状態だった。

「これじゃ、本当に呪いの魔剣ね……」

(ステータスニ逆補正ガ掛カル訳デモアルマイ)

「なにそれ」

(ソノ程度モ分カラナイノカ……イイカ?——)

魔劍のよくわからない言葉を聞き流しつつ、ようやく落ち着いて来たラキユースは辺りを見渡す。

そこは石レンガに覆われた貯蔵庫のような場所だった。床に塵が積もっていることから、物置としては使われていても長い間放置されていた事がうかがえる。

だがスペース的には中々な物で、大立ち回りをしようとも問題がないくらいの広さもあつた。

頼んだ日中にこんな理想的な場所を見つけるなんて、ウチの変態暗殺者は悔しいけど有能ね。そうラキユースは自分の仲間の頼もしさを再認識していた。

(——ト言ウワケダ。……オイ、聞イテルノカ?)

「ええ、もちろん」

聞いてない。

「だいたいねえ、何で貴方は私の魔劍キリネイラムに入ってきたの? というか名前は?」

(貴様ノヨウナ弱者ニ名乗ル名ナド無イ。アトコレハ偶然ダ。氣ツイタラコノ状況ダツタ)

「それで通用すると思つてんの? なに、冒険者舐めてんの?」

(知ルカ)

実際、魔劍は自分がこの中になぜ入ったか。その原因は何一つ分からなかった。気付いたらこの状況だったのだ。

ラキユースも貴族特有の観察眼と魔劍の態度から察してはいるものの、酒場の酔っ払った奴の如き面倒くさい絡みを止める事はない。それは紛れも無い、ただの嫌がらせだった。

本来ならば魔劍がブチ切れてもおかしくはない場面。しかし元来の真面目さが起因してか、それが嫌がらせだとは気付かず真面目に受け答えをしていた。

その結果、自分の握ってる剣にひたすらダル絡みする奇妙な構図が現在進行形で発生している。

「——だいたいねえ、動かせそうだからと乙女の体を奪って、挙げ句の果てには邪魔だったから仲間を殺す一歩手前まで追いやった？ふざけんじゃないわよ、あんた一般常識つてもんはないの」

(知ルカ)

いい加減無視しようか。そう思いはじめた魔剣が生返事すら面倒になってきた頃合いに、階段を降りてくる音が聞こえ始める。

降りてきたのは青いヘアバンドをつけた忍者——ティアだった。

これ幸いに魔剣はティアが来た事をラクユースに知らせる。

(……仲間が来タゾ)

「……ラクユース」

「ティア！」

「……」

だが、ラクユースに近寄ってくる事はなかった。それどころか、歩数にして二歩分は離れた場所で止まっている。

それを見たラクユースは、一瞬だけ悲しい顔をするがすぐに引き締め、笑顔を浮かべる。

(随分ト嫌ワレテイルヨウダナ)

(……うるさい)

「ティア。大丈夫。今の私はいつじや無い」

「……本当？」

「ええ」

ラクユースはティアの警戒を解くように笑顔で答える。

だが、ティアは距離を縮めるような事はしない。一歩も下がらず、されど一歩も進まず。一定の距離の元、まるで内側を覗き込むかのようにならラクユースを見ていた。

そんな仲間の様子を見て、ラクユースは自嘲していた。

(まあ、そうよね)

仲間を傷つけた奴を信用できるわけがない。全くもってその通りだ。

——いつそのままティアに……。

そう思っていると、ティアが近づいてくる。その様子に迷いはな

い。

だが、ある意味納得の結末だ。

そしてティアはゆっくり近づいてくる。その余裕は、こちらが暴れないと確信したからなのだろう。

そしてラクユースは覚悟を決め、真正面からティアの顔を見る。

「……元気でね」

「」

返答はない。

だが、代わりに腕を出してくる。そしてその腕は首へと向かっていき——その途中で、胸を鷲掴みにしてきた。

「……へ」

「——ラクユースが動けない現状。これは私の独壇場」

「ちよー!」

余談ではあるが、今のラクユースは無垢なる雪などの防具は全て外されていて、着ているものと言ったら普段着のみ。

つまりモロ感触が分かる状態だった。ナニとは言わないが。

完全に予想外な事をされてパニックになっっているラクユース。だが。鎖と重りの所為でろくに動くことが出来ない。特に利き腕は魔剣の関係上雁字搦めにされるレベルで拘束されているため、指も動かせない。

それがラクユースのパニック度合いを加速させていた。

「この大きさ。そして揉み心地。やはり私の目に狂いはなかった……!」

「あんたの目が狂ってるわよ!!」

そんな事はつゆ知らず。ティアはひたすらラクユースの胸を揉みしだいていた。

半狂乱状態のラクユースは全力で声を張り上げる。しかしどんなにラクユースが叫ぼうとも、当然のことながら体が動く事はないし、助けが来るわけでもない。けれどもティアの腕は止まらない。

「誰か! 誰かいらないの!?!」

「みんな今買い出しに行ってるから誰もいない」

「なんですって!?!」

ティアから告げられる衝撃の真実。

だがラキユースはそれに絶望しなかった。

「も、もしこのままヤルとしたら私が無垢なる雪を着れなくなるわ。その責任をどうとるの!」

「大丈夫。ドワーフにはイジヤニーヤ時代のコネがある。代わりなら何とかなる」

「しよ、正気!?!」

「うん。私、リーダーとイビルアイは死ぬまでには抱くつて決めてたから。身持ちの固いリーダーとやれるチャンスはココしかない」

「待つ、待った! イビルアイをあげるから! だからそっちに!!」

「イビルアイは頼みこめばヤれるだろうから別にいい」

(……盛ルノデアレバ、私ヲハズシテ欲シイノダガナ)

魔剣の呆れた声は、当然アンテナ^{ラキユース}が狂乱状態のため聞届ける者はいない。

ティアはラキユースの制止の声を振りほどき、手を服の下に入れる。

「ヒツ!?!」

「怖くないよ。大丈夫、上を向いてる間に終わるから」

そのままティアは先ほどまで手を置いていた場所に下から向かう。

その手に一切の迷いはない。かなりの場数をこなして来た者特有の滑らかさがそこにはあった。

(ああ、お母様、お父様、そして叔父様。私の不義理をお許しください) もうここまで来れば抑える事は絶対に無理。そう判断し諦めたラキユースは、遂に家族への想いに馳せていた。

そしてやり始めようとしたその瞬間——ティアが抱きついてきた。

「……よかった」

「へ? いい、一体どうしたの?」

何が何だかわからないラキユース。混乱していると、声が聞こえてくる。

「やれやれ。ちゃんと戻ってるみたいだな」

「そうっほいな」

「外側からは特に問題はなかった。多分ティアの触診は当たつてると思う」

「え？え？何これ？」

乙女の純潔が散らされる覚悟を決めたと思った瞬間、その張本人は抱き着いてきて、居ないと思っていた仲間たちがヒョッコリと階段に上から顔を出す。ラキユースにとっては、筋骨隆々の仮面男がメイドとしてやって来た時くらいの混乱があった。

「もし戻ってなかった場合、騙されて解放しようものならあの時の被害の比では無いからな。少し試させて貰ったんだ」

「私は呼吸を乱れさせ——」

「——私がそれを確認する」

「まあ、そういう事だ。疑って悪かったな」

「な、なんだ……」

ガガーランの豪快な笑いにラキユースは安堵をこぼす。

「続きがしたいのであれば構わない」

「絶対やらない」

「……」

その時のティアの顔はまるで捨てられた子犬のようだった。

◆？

「コレデイイノカ？」

「ああ、もちろんだ」

青の薔薇のメンバーは貸し切った酒場で、机を挟んで話していた。

その雰囲気は、何時ものような和気藹々としたものではない。まるで敵同士が戦闘前にするようなものだった。

常人であれば、立ち入っただけで悲鳴を上げて逃げ出すくらいに張り詰めた空気の中、イビルアイが話し始める。

「まずは確認だ。魔剣。貴様は——ではないのか？」

「……誰タソレハ？」

「いや、違うのならそれでいい。なら、お前の名はなんだ？このままだとなんて呼べばいいかわからなくて面倒だ」

「貴様達ノヨウナ弱者ニ教エル名ナド無イ」

魔剣は自分とともに創造された仲間達の中では、珍しく種で差別をすることはしない者だった。しかし、それは平等に興味がないということ。魔剣はイビルアイ達に名前を教えるだけの価値があるようには見えない限り、言うことはない。

しかし、次の言葉で覆された。

「そうか、なあ——ふれいやーまたはえぬびーしーという言葉を知っているか？」

「ツ!?ドコデ聞イター!」

ラキユース（魔剣）は立ち上がり、思わずといった様子でイビルアイに詰め寄る。隣にいたガガーランが止めようとするも、鎖で縛られた腕のまま吹き飛ばされていった。だが、足の鎖の所為でそれ以上詰め寄ることは出来そうになかった。しかしそれで安心できるわけでは無い。ガガーラン、ティアとティナはいつでも取り押さえが出来るように、腰を浮かして臨戦態勢に入る。

一触即発の状況になるが、イビルアイが腕を振ることで抑えた。

「大丈夫だ——まあ待て、物事には順序があるだろう?」

あくまで尊大な態度を崩さずに言うイビルアイ。

魔剣にとつて、それは首根っこ掴んででも聞き出したい情報。下手な動きができないこの状況、不本意ではあるが魔剣は相手の言うことを聞くしかなかった。

「……コキユートスダ」

「そうか。ならコキユートス、お前はどこから来たんだ?」

「ナザリック地下大墳墓ダ」

魔剣——コキユートスの言葉に反応したものはいない。

誰もナザリックのことを知らないことが容易に想像できる。そのことにコキユートスは僅かに肩を落とした。

「……それがお前のギルドか?」

「アア」

「なら、私たちがそれを探してやる」

「……ナニ?」

願っても無い相談だ。しかし、コキュートスはこれを信じることも出来ない。

「ソナ事信ジラレルカ」

これは確かにコキュートスにしてみれば、断る事が出来ない事だ。しかし、こんなムシのいい話。とてもでは無いが信用することができなかつた。

「なら交換条件だ。私たちがナザリックを探す代わりに、お前も私たちに協力をしろ。お前の力は強力ではある。しかし今のお前はただの剣。道具に過ぎない。だから、私たちがお前を使つてやる。どうだ、悪いものではないだろう」

「ムウ……アテハアルノカ？」

交換条件。今の状態なら確かに妥当な内容だと言えるだろう。しかし、それでもコキュートスの内心から不安を取り切れることは出来なかつた。

(……信用デキン)

コキュートスにとって、ナザリックの者は味方であり家族のようなもの。逆に言うと、他は有象無象に過ぎなかつた。

信用することも、信頼することも、はつきり言つてまず無い。もしあるとすれば、至高の御方々に命じられてその者を管理下に置いたりでもしない限りあり得ないことだ。

だからコキュートスは今軽い疑心暗鬼に陥っていた。

(ねえ、どうすんのかな)

(黙レ)

(言うに事欠いてそれ?……安心しなさいよ、私の仲間は裏切つたりはしない。神に誓つてもいいわよ)

(……ナラバ誓エ。偉大ナル創造主ニシテ至高ノ存在デアル、四十一人ノ御方々ニ誓エ)

(……誰それ?)

(スルノカ?シナイノカ?)

(いいわよ誓うわ。その四十一人の御方々に)

はつきり言つて何の意味もない誓い。だが、コキュートスにとって

はこれ以上にならない安心感を産んでくれた。

「……仕方ナイ。協力シテヤロウ」

その一言にとともに、周りを張り詰めていた空気が少し弛緩する。イビルアイは見るからに安心をしているのが仮面越しからでも伺えた。

「そうか、なら一つこれから向かう場所がある」

場所というより人探しだけだな。そう言いながら、イビルアイは懐に入れていた地図を広げ始めた。

そこには、大雑把な国の位置と亜人圏の国境が描かれている。

「人探シ？」

「ああ。そいつはとても長生きをしているやつでな。きつと力になってくれるはずだ」

そう言いながら、イビルアイは地図のある国を指差して言った。

「——リグリットという人物を探しに行く」

2話

——そこは、地獄だった。

家は焼け、作物は荒れ果て、人は死に絶えている。

生きている者など存在していなかった……いや、訂正しよう。一人だけ存在した。

折れ曲がった両手足に潰れた右目。もう痛いと感じることもないだろう。そんな中、彼女は懸命に一人の女の子を抱き続ける。

温もりなどない。ただただ冷たい体。彼女は人が死に絶えた村の真ん中で抱きしめ続ける。

——ごめんね。そう呟きながら。

◆？

そこは王都のように、とても活気のある街だった。

いや、それ以上の活気にあふれているだろう。

それが亜人と人間が共存する都市国家——アーグランド評議国だった。

彼女たち蒼の薔薇一行はリグリット探しのために、その手掛かりを探るべく真なる竜王にしてイビルアイの旧友であるツアインドルクスⅡヴァイシオンの力を借りるため、それと行き違いになるのは嫌だから端っこから探そうと思ったため。数日を費やし、この評議国へとやってきていた。

「ふむ。やはり、こちらの方が活気はあるな」

「だな。王都は質が上でも活気がないからな」

「税が重いから仕方ない」

「大手しかない」

「だな。……どれ、あっちの方を見るぞ」

「みんな程々にね」

リグリット捜索のためにやって来たが、それでも楽しむ事を忘れない蒼の薔薇一行。全員は、馬車から降りるなり露店巡りを始めた。

明らかに楽しんでいるガガーラン。

とりあえず付き添っているティアとティナ。

顔を仮面で隠す事により、クールな雰囲気をかろうじて作り出しているイビルアイ。

そしてその三人を後ろから見守るように、けれども早足で進んでいくラクユース。

貴族としての眼を持っているラクユースでも、いろいろなものが入ってくる露店を見て回るのはとても楽しいことだった。

特に亜人が多くいるアークランド評議国の露店なら珍しいものもきつと多いに違いない。そんな期待もあつて楽しさを抑えられていなかった。

普通の冒険者と言うより人間であれば、亜人種が多くいる評議国でここまで無警戒に店を回ることはないが、元よりイビルアイと一緒に冒険をしている彼女たちからすればなんら問題のないことだ。

周りから奇異の視線を集められても動じない心の強さこそがアダマントイト級に不可欠な要素なのかもしれない。

「いったいどんなものがあるのか楽しみなね」

(……目的ヲ忘レテナイカ?)

「そんなことないわよ。安心しなさいって」

ラクユースは左手で、鞆に収まっているのキリネイラムコキユートスことをバシバシと叩く。

その様子を見ていた周りは、いきなり一人芝居を始めたように見えるラクユースにドン引きをしているが、本人はそれに気づいていない。

周りから奇異の視線を集められても動じない心の強さこそがアダマントイト級の冒険者に不可欠な要素なのかもしれない。

「このブーツどうだ? なかなかいいんじゃないか?」

「……おい、それは私の身長を見て言ってるのか?」

「ちっちゃいから仕方ない」

「ちびは黙って厚底履けばいい。そうすれば男受け良くなる」

「お前らあー!」

「じゃあ、こっちはどう?」

「髪飾りか?」

「ええ、イビルアイかわいいしこう言うの似合うんじゃないかなって」
「……ふん、どうせ私には似合わない。そうだなガガーランにでも渡しておけ」

「おい、顔赤くなってるんの耳でばれてるぜ」

「う、うるさい!」

口だけ賢者の残した言葉で、女三人寄れば姦しいという諺があるが三人どころか五人いる今の状態はもつと姦しい。

当然彼女達は周りからかなり注目を受けていたが、全く気にすることなく露店巡りをしていた。

だが、それも少しの間。

なんだかんだ言っても優秀な彼女たちは目的を忘れることはない。

目的のツアーに会うために、彼女たち一向は評議国の中心部に位置する竜王たちの集う場所。評議会の前にまで来ていた。

「じゃあ、行ってくる。話を付けたら戻ってくる」

「いつてらっしやーい」

「頑張れよー」

「初めてのおつかい」

「できるかな」

「うるさい!」

イビルアイが門の中に入っていくのを確認した後、彼女たちはその近くにあつた噴水に座り込んだ。

だが、全員特に疲れた様子はなく、ティアとティナに至ってはいい相手がいないものかと探していた。

「あー……何をしてるの?」

「いい男の子探し」

「いい女探し」

「大体亜人しかいないわよ?」

「構わない」

「むしろ構ってみたい」

「……はあ」

ラキユースは黙って彼女たちにジュエスチャーを送る。その意味は伝言で呼ぶからそれまで好きにしろ。

彼女たちはそれにサムズアップで返し、目にもとまらぬ速さで解散した。

それに合わせるように、ガガーランものつそりと立ち上がる。よきそんな相手でも見つけたのだろう。

事前にイビルアイからそれなりに時間がかかると聞いているため、別段引き留めておく必要もない。そう判断してラキユースはガガーランにも行つてよしとジュエスチャーをする。

その結果、噴水に座っているのは彼女一人になってしまった。

時間でいえば夕刻の今、他に座っている者はいない。というよりあまり見ない人間に気味悪がって近寄って来る者すら少ない。若干距離を開けて目の前を通るものの方が多いだろう。

(露店まだ見たかつたんだけどなあ。こういう時、リーダーつて不便ね)

ボーツと空を眺めていると珍しくコキユートスが話しかけてきた。

(随分亜人が多イナ)

(ここは今までいた王都とは違って亜人や人間が入り乱れて生活しているのよ。そういえばあなたの種族は何なの？人間じゃないでしょ)

さりげなく探りを入れるラキユース。今までなら無視してたであろうコキユートスだが、協力関係を作った以上話すのもやぶさかではなかった。

ヴァーミンロード
(蟲 王だ)

(……聞いたことないわ)

(ソウカ……マア仕方ナイカ)

私よりはるかに格下な貴様らでは仕方ないか。そんな軽い失望を思いながらもコキユートスはあきらめる。

彼にとって彼女らははるかに格下。ダントツで強いイビルアイですら、彼の物差しでいえば大差のない有象無象。だからこれは仕方の

ない事だ。そんなことをナチュラルに思っていた。

彼からしてみればコーラを飲めばげっぷが出るくらいに仕方のない事。しかし彼女からしてみればそうではなかった。

(なら教えてよ。あなたについて)

(ナゼダ?)

(貴方のことを知りたいからよ)

どんな相手だろうと、どんなものだろうと知らないものであれば知ろうとする。冒険者にあこがれて屋敷を出たときから彼女の本質は何も変わってはいない。彼女は未知を既知に変えたいと願う純粋な冒険者なのだ。

(私はあなたが気になるの。どんな形をしてて、どんなところで生きていて、どんな暮らしをしているのかが)

(……マア、イイダロウ)

コキュートスはその熱意に負けて話し始めた。

自分の種族のこと、自分の住んでいるナザリックの五階層のこと、そして栄えあるナザリックのこと。

彼は自分で話してもいいと思えることを粗方全部正直に伝えた。

これがどこぞの悪魔なら、自分や至高の御方々が有利になるようにうまく情報を調整しただろう。だが、彼はそれら全部——自分の種族なんかよりもナザリックのこと——を馬鹿正直に伝えていた。

それが彼の、コキュートスの精神性なのだろう。

(へー、私そんな蟲系のモンスターなんて見たことないわ……アザルリシア山脈に行けば見れるかも)

(……ソレガドコカハ知ランガ、今ハナザリックノ搜索ノ方ガ急務ダゾ)

(わかってるわよ。それに元に戻れば探さなくても見ることができるとしね)

わかってるのかわかってないのかわからない声色で返答をするラキユース。

そしてそんなことをしていると、イビルアイから声がかかる。

「おーい！もう来てもいいぞ」

「はいー！」

彼女は手を振るイビルアイの元へ向かうため、立ち上がり歩き出す。

声を通るようにかぴよんぴよんと跳ねる姿が若干かわいらしいなと思っていた。

◆

「——それが僕のところに来た理由かい？キーン」

「ああ。それとこれについてなんかわかることはないかと思つてな」

評議会の真なる竜王が住まいし一室。そこで彼女たちは話を聞いていた。

キーン——イビルアイから概要をすべて聞き終えたツアーは左右に首を振る。

「すまないが、僕にもわからないな。こんな特殊な事例、今までの揺り返しで見たことがないよ」

「……やはりか」

悠久に近い時を生きた竜であるツアーですら、こんなことはわからないという。

「でも君はNPCだよな？それなら普通ギルドと一緒にじゃないとおかしいんだけどなあ」

「私モ困ル。シカシ、此方二来テカラナザリツクノ気配ガマルデシナイノハ事実ダ」

「むう……困つたなあ」

「何かわかることはないのか？」

「うん。ちよつとお手上げかな」

「ならリグリットを探すしかない」

「唯一の希望」

「そうだね。今は彼女に聞くのが先決だと僕も思うよ。それに、リグリットの居場所ならわかるしね」

「どこにいるんだ？」

「王都にいるよ」

それは思いもよらない答えだった。

彼女たちは当然王都を出発する前にくまなく探したが、見つかることはなかったため居ないと判断して居たのだ。

「行き違いになったのか？」

「君たちが王都からきたっていうのならそうだろうね」

「ならさっさと戻ったほうがいいな。そうじゃ無いとまた何処かに行っちまう」

「そうね」

見つかるとは思ってはなかったが、それでも行き違いになったと聞き若干嫌気が出るが、さっさと切り替える。

ちなみにもう用はないと言わんがばかりに、コキュートスは体の主導権をラキユースへとぶん投げるかのように返していた。

「それならすぐに戻るとしよう。教えてくれてありがとうツアー」

「礼には及ばないよ」

「ありがとうございました」

「あんがとな」

「どうも」

「センキュー」

「あつ、そうだ。キーノ、ちよつといいかい？」

「なんだ？」

踵を返し、帰ろうとするイビルアイの事をツアーは呼びとめる。

「もし、ぷれいやーを見つけた時は教えてはくれないか？」

「ああ。勿論だ」

「じゃあ、これを君に渡しておくよ」

そう言いながら彼は一つのブレスレットを後ろから取り出し、イビルアイへと渡す。

丸い真珠が何個も繋がっていて、南方で売られていると言われる数珠を彷彿とさせるものだった。

「それは使うと僕と連絡が取れるようになってる。だから見つけた時はよろしくね」

「わかった」

「じゃあ話は終わりだ。君達の旅に幸あれ」

3話

「ガゼフが部下共々戦死!?それは本当か!」

「はい。王国の貴族から聞いた情報ですので間違いないかと」

豪華絢爛な部屋で大きく机をたたきながら、彼——ジルクニフ・ルーン・フアロード・エルⅡニクスは思わず立ち上がる。その眼には隠し切れない興奮と悲しみが浮かんでいた。

「そうか……ついに奴は殺されたのか」

「惜しい人材でした。彼がもし帝国にいたら……そう思うと失意の念を隠し切れません」

「ああ。全くだな」

ジルクニフは鷹揚に頷く。

「死因は?復活魔法が効く程度の損壊……いや、もしそうなら青の薔薇あたりに依頼して蘇生させてるか」

蘇生魔法は代価に金貨を要求する特別な魔法。その金額はなかなか法外なものだが、一国の王がその程度の金を払えないわけがない。復活の報がなく、死亡の報のみが届いた。つまりそういうことだ。

ロウネは首を一度縦に振りながら話し始める。

「残念ながらその通りでございます。損傷具合からすると獣の餌にされたのかと」

「まあ……そうだろうな。発見場所は?」

「開拓村の近辺だったそうです。もちろんのことながら、村の住人も全員殺されています。しかしながら不可解なことが一つあります」

「言ってみろ」

「今回の騒動、帝国がやったものだと言われているのです」

「何も不思議なことではないだろう」

帝国と王国は、本国との緩衝地帯となっているエ・ランテルを狙う敵国同士。

真つ先に疑われるのはなにもおかしいことではない。それどころかうち以外のところに殺されたと本気で考えるのなら、王国は自分が

想像していたよりも馬鹿な国だ。ジルクニフはそう思っていた。だが、次の言葉で態度が変わる。

「それだけならその通りです。しかし、ガゼフが殺された場所に帝国の鎧が複数個落ちていたらしいのです」

「なに？」

ジルクニフは背もたれに体を預けながら、顎に手を置く。

「その時国外にいた部隊はあるか？」

「ありますが、あくまで周辺のモンスターを狩っていただけです。発見場所である開拓村から帝国まで往復する時間を考えると、魔法でも使わない限りまず不可能だと断言できます」

「うちの鎧が流出したのか？」

「我が国の鎧はすべて流通が管理されています。ですので兵士が戦死した場合でしか、鎧が出回ることはありません。あり得ないとまでは言いませんが、可能性としては低いでしょう」

「そうなる自作されたか」

帝国製の鎧は、大して見た目を重視していない。

昔の、貴族が力を持つていた時はそれなりに重視をしていた。だが大粛清の後、皇帝はそんなものに費やす金はない。そう一蹴して質実剛健な今の鎧へと姿を変えたのだ。

そのため、表面だけ似せることはそう難しいものではない。

ロウネも賛同するように首を振り下ろす。

「おそらくはそうかと」

「もう少し見た目にこだわるべきだったかもしれない。それで、下手人はだれかわかっているのか？」

「いえ。断定はされていません。しかし、皇帝がやったのでないなら自然と絞られてきます」

「だろうな。奴は周辺国家最強の剣士で、直属の部下はうちの兵士よりも数段強いと聞く。不意打ちを受けようとも、そうそうやられることはないだろう」

それが全滅するほどの強大で、帝国と同じ鎧を作っておいて足らないものたち。

それは一定の戦力と国力、それがそろっていることの証拠だ。
ならば答えは一つ。

「王国の馬鹿どもが、法国を引き入れたか？」

「おそらくはそうかと。かつて竜王国で発見した、天使を召喚する部隊がいる法国なら遠距離から一方的に仕掛けることも可能だと思います」

「なるほど……な」

遠距離からの一方的な魔法攻撃。これをやられて生き延びる戦士は存在しない。

帝国の魔法部隊でも常套手段だ。

ジルクニフは気持ちを切り替えるように頭を振る。

「法国がガゼフを殺した理由はなんだと思う？」

「何らかの行動に支障をきたすからではないのでしょうか？」

「そんなこと言わなくてもわかる。俺が聞きたいのはその先だ」

背もたれに体を預けて、楽な姿勢を取る。

「現状、法国がガゼフを殺す必要性が全くない。それどころか生かしておいた方がいいくらいだ」

「帝国に付け入るスキを見せないためですか」

「そうだ。法国と王国の先にある評議国。ここはかなり仲が悪いことで知られているのはお前も知るところだろう」

「ええ」

人類至上主義を掲げている法国と亜人を受け入れる評議国。この仲はとてつもなく悪い。

おそらく、王国や帝国といった間に挟まる国がなければすぐに小競り合いを始めてもおかしくはない。

だから、貴族をなびかせておけば現状を維持するのがたやすい王国の力を削ぐことは悪手。その程度わからない法国ではない。

「なら用済みになった。ということではないのでしょうか」

「殺した方が益になる。そう判断したと？」

「はい。私たちが王国を削ぐことを優先させる何かがあったのではないか。そう判断します」

このまま順当にいけば、定例の戦争を2〜3回は減らして併合することができる。

そうすることで、法国側は評議国と帝国が手を結ぶことリスクにおびえる必要が出てくるのは明白。

だが、ロウネはそのリスクを背負ってでも法国は勝ち取りたいものがある。そう判断したのだ。

後ろで我が関せずとでもいうような表情をしている重爆も頷いていた。

「だろうな。それで、優秀な秘書官はどう考える?」

「乗っかるべきかと。早々に決着をつけ、法国へのカードにするのが一番だと思考します」

「そうか……よし、すべての部隊の部隊長の予定を合わせろ。緊急招集だ」

ジルクニフに礼をしてロウネがその場を立ち去ろうとしたその瞬間、扉をたたく音が鳴り響く。

「ジルクニフ様! 法国の者がいきなり尋ねにきました!!」

◆?

静寂に包まれているはずの共同墓地。

そこには珍しく、大勢の人が集まっていた。

その人数は50を超えており、人数の関係上追い出され、塀の外から眺めている人もいる。

そんな中、一人の老婆が花を渡すため前へ出る。

顔はしわがれ、手足も細い。まさに典型的な老婆だ。

「……わしより先に死んでどうする」

老婆は一言、言葉を添えようとすぐに花を棺桶の中に投げ入れる。

明らかに礼儀作法を掻いた雑なものであったが、貴族から平民までさまざまな人種が入り乱れている現状でそれを指摘するものはない。

そしてそのまま、先に花を入れて後ろで待っていた女性たちのもとに、老婆は歩み寄る。

「終わったか?」

「……ああ、終わったよ」

仮面をかぶった女性に話しかけられた老婆は静かに首肯する。

「なら、行きましようか」

「そうじゃな」

老婆は歩き出す。

その後ろ姿を見る者は誰もいない。

彼女たち青の薔薇が王都へと帰還したのち、衛兵から告げられた言葉はガゼフの戦死についてだった。

知らせを聞いてすぐ、確認のために墓地へ行つたとき探し人であったリグリットと遭遇をしたのだ。

一言も言葉を発さずに、宿屋へと歩いていく。

いつも明るく、チームメイトも仲が良いことで有名な青の薔薇だが、その面影は今はない。

意外だ、珍しい。そう周りの人が言ってくることもない。ガゼフ戦死が国全体に知られてからというもの、国全体の活力というのが著しく落ちていく。活発だった露店も、活気こそあれどそれはあくまで鍍金で表面を塗っただけの物。本当の意味での活気はまるでない。

それほどまでに、ガゼフストロノーフという男は慕われていたのだ。

そうして無言のまま、リグリットがあてがわれた部屋の前まで付く。

いつもは年を感じさせない快活さのあるリグリットだが、今だけは年相応の老婆と変わらなかつた。

「……すまんのう、宿屋の金は後で渡すよ」

「気にしないでいい。情報に対する代価だとも思っといてくれ」

「そうかのう？ じゃあ、また明日」

「おう」

「ばいばーい」

リグリットが静かに扉を閉めたのを確認したのち、彼女たちも自分の部屋へと戻った。

◆

彼女たちは一人一部屋づつ借りていたのだが、今はラキユースの部屋に全員で集合していた。

全員の顔は暗く、元気もない。

だが話し合わねばならないことがある現状では、悠長なことは言つてられない。

ラキユースは仕切りなおすように、手を鳴らす。

「はい、じゃあ情報の確認をするわよ」

「リグリットも知らなかった」

「200年前でもそんなことなかったって言った」

「ぶれいやーを何度か見てきたリグリットでさえも分からないのか……」

結果的に言えば、今回のことは完全に無駄足だった。

リグリットはこんなものを見たこともなければ、聞いたこともない。本当に初めての例外的な事象だったのだ。

ラキユースの腰についてる魔剣がカタツと動いたかと思うと、すぐに止まりラキユースが怨嗟の声を上げる。

「オイ、結局無駄足ダツタデハナイカ」

魔剣——コキユートスは今回のことで憤っていた。

「アインズ・ウール・ゴウンニ戻レルカラ、貴様ラニ使ワレルコトヲ良シトシタ。御方々ノ元へ再び戻レルカラ、ツマラン会話ニモ参加シテヤツタ。貴様ラノ志ガ良イモノダト思ツタカラ信ジテヤツタ。

ナノニ無駄ダツタノカ？ 蛇足ダソクダツタノカ？ フザケルナ。私ハドウスレバ戻レルトイウノダ!？」

子供の癩癩のようにひたすらに怒り狂う。

しかしそれは八つ当たりでしかなく、怒鳴ったところで何も変わらない。

だが、だからと言って何も言わずにはいられなかった。

漸く戻る方法を手に入れたと思っても、蓋を開けてみれば期待はずれ。それは彼からすれば到底耐えられる者ではなかったのだ。

「私ハコレカラドウスレバイイ？ ドウスレバイイノダ！」

それに対する返事はない。

当たり前だ。何か情報を持っていると思って尋ねた先が、悉く外れたのだ。この先、どうすればいいかなんて到底答えられるわけがない。

「——ッ!!」

そして、無言になった空間。

ラキユースは飛び出して行った。

後ろから止める声が聞こえるが、今の彼女に届くわけもなく。

そのまま、彼女は王都の中へと消えていった。

◆

走る。疾る。奔る。彼女はまさに風のごとき素早さで、王都を飛び出して平原を駆け回っていた。

その早さは人間の出せる速度を超えている。それどころか、馬ですら今の彼女には到底及ばないだろう。

(ねえー止まりなさいよーねえってば!!)

「——」

そんな中、彼女たちは言い合いをしていた。

しかし、それは一方的なもので、ラキユースの意見が聞いている気配はない。おそらく、壁に向かって怒鳴っていた方がまだ建設的とも言える。

なら、先の時と同じように無理やり主導権を奪い取ればいいと思うが、そうもいかない。

今彼が出してる速度はとてもではないが、尋常なものではないのだ。無理やり止めようものならそれこそまともな受け身も取れず大惨事になってしまう。

だから彼女はひたすらに声をかけていた。

だが悲しいかな、その祈りは通じず、目の前の景色は切り替わって行く。

平原から荒地、そして森の中。

何度ラキユースが話しかけてもまるで無駄。そして外部から襲撃があるものなら鎧袖一触で薙ぎ払ってしまう。

そうしてただひたすらに森の中を駆け巡る。

そしてもうダメか。そう思った時——奇跡が起きた。
突如、彼の足が止まったのだ。

ようやく話を聞いてくれる気になったのか。そう思い話しかけようとした瞬間——コキユートスは剣を振るった。

何も見えない虚空中で剣を振るう。これにはさすがのラキユースでも困惑する。

(へ? 一体どうした——)

キン、そう甲高い音が聞こえた。それはまるで金属同士がぶつかり合う時に起きる音——すなわち敵襲だ。

(な、なにになに!?)

「ツチ」

トブの大森林にいる以上、モンスターの襲撃は避けられないのは当たり前だ。現に何度か走っている時に攻撃をされてもいた。しかし、それは誰から攻撃されたかわかった。

今のように、見えなくらいに早い攻撃など一度もない。

(ど、どこから攻撃されてるの!?)

「静カニシロ。集中デキン!」

キン、キン、と甲高い音のみが鳴り響く。

魔剣と見えない何かが何度も何度も超高速でぶつかり合っているのだ。

コキユートスは不可視に近い超高速の攻撃を全て剣一本で凌ぐ。

はたから見れば残像すら見えない高速域の剛撃。しかしコキユートスはその攻撃の速度を、目を凝らしてみれば何とかとらえることができる。しかし、対処で手いっぱいになっていて索敵をする暇などどこにもなかった。

そんな状況にラキユースは混乱しているが、それ以上にコキユートスも混乱をしていた。

彼ほどの剣士になれば、剣から伝わる衝撃と音で大体の硬度がわかる。そしてこの固さなら余裕で切断できる。そう思って弾いた後の二撃目は全力で切り払った。

しかし、現実はまだ甲高い音を奏でるだけ。切断はおろか、ヒビを入れる事すら出来ない。

それは何故か？まず初めに自分のステータスが思っていたより下がっていたか？そう思ったが、これだけの距離を走れる時点でまずありえない。もし本当に下がっていたとしても、奇襲を目でとらえられた以上大した強さではない。きっと切り払うくらいたやすいだろう。ならば何が悪いのか？

単純に武器がボロいのだ。

彼がかつて普段使っていた刀に比べればそれこそ桁が違うほどに武器間で差があった。

「ココマデトハ……!!」

索敵もできず、迎撃に動くこともできない。そして攻撃の出の速さから、特殊技能ススキルを使う暇もない。それはつらい状況であることには間違いないだろう。

しかし、彼にとつてこの程度の攻撃はいつまでだろうとしのぐことはできる。それこそ、相手のスタミナが切れるまで付き合うことは可能だ。

敵の正確な位置がわからない以上、こちらから出向くのは常に即死クリティカルの危険が付きまとうので相手の根気切れを狙って持久戦をするのが一番いいだろう。そう結論付けていた時、ふと頭の中にある考えがよぎった。

——諦めればいいんじゃないか？

今ここで敵の攻撃を甘んじて受ければ、剣を手放せば、瞬きもせぬ間に即死するだろう。

そうすれば自分は煩わしいこの女から解放される。

その後、自分はここに捨て置かれることになるだろう。しかし、誰かがこの魔剣を触った時に女同様に体を奪えばいいのだ。

そう、コキユートスは考えていた。

なんと甘美なことだろう。

ここで手から剣を離しさえすれば、解放されるのだ。自分にあれこれ言つてこない体へと変えることもできるかもしれない。

そう思い彼は攻撃を甘んじて受けるため、剣を手から離そうとするが――離れない。

その後も、攻撃の合間合間に手を離そうと思うも手から剣を離すことができない。

(……ナゼダ?)

彼は自分に問いかける。しかし、自分の中で都合のいい納得のできる答えが出てこない。

それはなぜなのか?それも出てこない。

(――当たり前でしょ)

心の中で声が響く。

(もう死んでもいい。なんて言う人、冒険者やってきてごまんと見てきたわ。でもね、その中で本当に死にたいって心の底から思っている人なんて一度も見たことないわ)

彼女にも、彼の苦悩が漏れ出していたのだろう。

ラキユースの断言するような声に、コキユートスは苛立ちながら答える。

(……ソレハ私モ同ジダト言イタイノカ?)

(そうよ)

再び断言するような声。

それにコキユートスは深い苛立ちを覚える。

「ソナナコトアルハズガナイ!!」

憎しみのままに、全力で切り払う。

それにより先ほどまでよりも大きく弾かれる。その際に一瞬だけ、どこから攻撃が来てたか見えるがそんなことをコキユートスは気にも留めなかった。

(あるから言ってるんでしょこの頭でつかち!!)

(違ウ!!)

(ならなぜさつきと死なないの?なぜ動くの?なぜ自殺しないの?)

(――ア)

彼も理解した。いや、思い出したのだろう今までの行為を。

本当にそうなのであれば、全速力でこの体を岩にでもぶつければよ

かった。しかし彼はそんなことをかけらもしようとはせず、ただひたすらに走っていた。

彼自身その行為に何も違和感を感じなかった。

その時から今のようない気持ちはあった。

——だが、彼の腕は先ほどと変わらず攻撃を弾いていた。

(ソウカ、私ハ死ニタイノデハナク止メテモライタカツタノカ)

なんということだ。こんなただの笑い種じゃないか。こいつに止めてもらいたかったとでもいうのか？

そう思うとコキユートスは自然と笑いが出ている。

(フッフ)

(やっとなびいた?)

(アア、ソウダナ。マダ死ネナイ)

そうだ。自分は捨てられたのではない。きっと何らかの事故で今こうなってしまっただけなのだ。

だから、まだ死ねない。まだ動かないといけない。まだ探さないといけない。

たかが数人に聞いた程度であきらめる愚昧なのか？その程度で階層守護者になれるほど、我らのナザリツクは落ちぶれたものなのか？

そんなことあるはずがない。

ならばどうすればいいか？

そんな簡単な話だ。

(——オイ)

(ん?)

(手伝工)

ぶきつちよに言い放つ、助けてという言葉。

それに彼女は微笑みながら頷く。

(いいわよ、その代わり協力しなさいよ)

「イイダロウ。何ヲスレバイイ?」

(背中に背負ってる剣を外して)

背中の中の剣束を止めていた金具を外す。

当然ながら、その外す瞬間でできた隙へねじ込むようにあの超高速の

攻撃が襲来する。

その距離は先ほどよりもはるかに近い。剣ではじくのは到底間に合わないだろう。

それなら剣でなく籠手で弾けばいい。そう思い行動しようとするが、違和感。体が動かない。

「ナツ!？」

この感覚には覚えがある。そう、彼が不本意ながら彼女たちに負けた時と同じだ。

血迷ったか!? そう問い詰めたい気持ちも確かにあったが、それでも彼は何も言わなかった。

そしてあと一步でラキユースの頭が吹き飛ばされる。そんな時、突如コキユートスが落とした剣群の中の一本が割り込むような形で頭と攻撃の間に入り込む。

その結果、剣は砕けたがそれを犠牲に頭が飛ばされることを回避した。

(集中するために主導権は無理矢理とった! この隙に何とか探し出して!!)

残る剣は5本。その中でどうにかしろ。彼女はそうやってきたのだ。

明らかに英雄級のモンスター相手に、数秒で何とかしろと言ってきたのだ。

常人であればなすすべなく殺される、英雄級でもあと一步のところまで殺される。まさしく詰みに等しい状況と言えるだろう。

そして自分が裏切ってもあつさり死ぬ状況。そんな場面を託してきたラキユースに思わず笑みを浮かべていた。

(随分ト頼ツテクルモノダ)

ならば、自分も働きで答えよう。そう考える。

「――」

コキユートスは砕かれていく剣を見ながら、あたりの音を感じる。

走り抜ける音や木や枝がしなる音。幾十にも重なり聞こえる音の中、彼は一つの音を――何がしなる音を目の前の木から感じ取っ

た。

「——ッ!!」

彼はすぐさま、ラキユースから体の全権を奪い取りながら、最後の剣を犠牲にして前へと突き進む。

一閃。

一筋の銀線が閃いたと思うと、目の前にあつた樹齢100年は超えるであろう大木を切り倒された。

これには堪らず、木の上から攻撃を仕掛けていた者も降りてくる。

巨大な体躯に叡智をたたえるような力強い眼。

その風貌から、彼女は正体を突き止めた。

(森の賢王……)

森の賢王は、四足歩行で彼女たちの前へと躍り出る。

その顔には驚愕と感心の思いがにじみ出していた。

「拙者の登っていた木を切り倒す技量。見事な腕前でござる」

「アタリマエダ」

(ちよつとそれ私の功績なんですけど!!)

「喧シイ」

「む?何か言ったでござるか?」

「イヤ、何デモナイ」

「そうでござるか」

叡智を集めたような目には困惑が映るが、それを気にするコキユートスではない。

ギヤーギヤーうるさい同居人を無視して剣を構える。

それを見た森の賢王も戦闘態勢へと入る。

「本来ならその腕前に免じて見逃してもいいところでござるが、拙者の縄掘りを荒らすものに掛ける慈悲はないでござるよ!!」

先手を取ったのは賢王。

先ほどと同じように尾を使い攻撃するのかもしれない、コキユートスは構えるが思惑は外れた。

賢王はコキユートスが構えた際にできた一瞬の時間を使い魔力を開放。そして魔法を発動させた。

「全種族魅了!!」
チャームスビーンズ

閃光。

賢王から放たれる魔力の光が彼の眼を焼き、そして動きを止めさせる。

「魅了か!?!」

「隙あり!」

森の賢王よりも圧倒的にかげ離れたレベルを持つコキュートスに、本来であれば魅了など効くはずもない。

だがしかし、今の彼……いや、正確には彼が間借りしている体は、ラキユースはそうではなかった。

——精神は肉体に引つ張られる。

まさにこのことだろう。彼は、コキュートスは一瞬でレジストをして見せた。その刹那にも満たない間では、圧倒的に格下である森の賢王に対して隙を見せたとも言えない。

しかし、彼がレジストをしたその瞬間、一瞬だけ体が止まったのだ。ある意味当然のことでもある。

いくら、精神コキュートスが強くてもそれを受け止める器ラキユースが強いとは限らないのだから。

彼の精神が一瞬もしないうちにレジストをしたが、彼女の体は一瞬でレジストをしてしまったのだ。

その結果、彼は一瞬だけ行動が遅れてしまう。

その時間は一瞬。しかし、かの賢王が行動するには十分すぎる時間。

賢王は、鎧に覆われていないラキユースの頭を吹き飛ばすべく、自分の中で最速の攻撃である尾による突きを放つ。

その速度はまさに稲妻。

瞬き一回分にも満たない速さでラキユースの顔めがけて飛びかかる。

(避ケレヌッー!)

コキュートスの目には、スローな速度で迫ってくる賢王の尾。しかし、体は言うことを聞いてくれない。

時は無慈悲に進む。

一ミリ、二ミリと段々と近づいてくる尾が見える。でも彼にはどうすることもできない。

そしてついに当たる。そう思った瞬間——声が響いた。

「か、わせえええええ!!」

なんとという奇跡だろう。怒号のような声とともに、首が傾いた。確実に死んだと思ったのに生きてる。

お互いに勝敗を決したと思いきが数瞬止まっていた中、体が勝手に動き出す。

1メートルも離れていない間など、ラキユース自身が動いたとしても一瞬で詰められる。

互いの距離は吐息を感じられるほどに近い。

——そして、構える。

その時生じた魔剣の輝きに、森の賢王も焦ったようになりふり構わずに突っ込んでくる。

「暗黒刃」

振り下ろされる爪を、体をそらすことで避ける。

その際に額を切られるが気にしない。

「超弩級ア」

伸びきった尻尾を体を振ることで無理やり戻し、再び攻撃すべく構えなおそうとする——しかしもう遅い。

「衝撃波オオ!!」

剣から湧き出る魔力の奔流は、せめてもの抵抗にと突き出した尻尾ごと森の賢王を飲み込んだ。

4話

雲一つない青空、鳥たちが戯れる庭園の中で、私はいつも叔父の武勇伝を聞いていた。

山のように連なるトロールの群れを撃退したり、村を襲いに来たギガントバジリスクを追い返すどころか討伐するという大偉業を成し遂げたアズスは、当時箱入り娘だった私にとって隣の国や森の先といった新しい世界を見せてくれる——言い方は悪いが——色々な冒険譚が書き込まれた絵本のような存在だった。

「——すごいわ叔父様！」

「そんなに目を輝かしてくれるなら嬉しいよラクユース」

「私もそんな冒険をしてみたい！絶対する！」

「ははは、ダメだよラクユース」

アズスはいつものようにラクユースを慈しむように撫でながら、諭すために言う。

「君は末席の私とは違い、立派な貴族なんだよ？その地位を忘れてはいけない」

「ぶうー……叔父様は毎回そう言うけれど別に叔父様も私も同じ貴族で違いなんてないじゃない」

「いいや、まだ君が知らないだけで充分違いがあるんだよ」

「だけど、とアズスは私の横にいる執事に一回だけ目を向けた後に少し笑いながら言う。

「君と友達との間には何も違いはない。対等な関係さ」

「つまり？」

「ラクユースと私は？」

「友達！」

「ああそうさ。友達のラクユースは何がしたい？」

「国の外に行きたい！」

「ああ、任せておきなさい」

——そんな目が輝き胸が躍るような絵本ばかり読んでいた私が、そのまねごとをするために家を飛び出すのはある意味必然だったのか

もしれない。

◆

——ズシンズシンと、巨体が地面を踏みしめる音が聞こえる。目が覚めると、彼女は巨大な生き物の背中の上に載っていた。

すこしその生物の毛皮を堪能していると、背中の感触に気づいたのかこちらに顔が向く。

「何でござるか?」

「いえ、ただ撫でただけ。気にしないで」

「了解でござる!」

真ん中から先のない尻尾を機嫌のいい犬の如く振り回しながら、巨大な生物——森の賢王は返事をする。

結果的に言う最後までに放ったラキューズの攻撃は、彼の尻尾を完全に砕きはしたものの仕留めることができなかった。

だが、そのまま押し切れる。そう判断して突っ込もうとした時、賢王から降伏の宣言が出た。

賢王自身も、尻尾があつたから保てた均衡だと自覚していた。それゆえ、尻尾がなくなつた時点で、自分に勝ち目がないのを悟つたのだ。

そんな獣らしからぬ知性を見せ、降伏をした賢王に交換条件として人がいるところまでの案内を頼んだのだ。

流石に森から出ない生活をしてた賢王では大きな街の場所まではわからないが、それでも近場の村の場所は知っていた。

「それにしても不思議な感覚でござる。拙者、今まで負けそうになつたことは何度かあつたでござる。しかし、この尻尾を砕かれるなんて初めてでござるよ」

「まあ、あれだけ固ければね」

はははと笑いながらも彼女も同意する。

確かにあの技は自分の一番の技。そこいらの魔法や武技なんかとは比べ物にならない威力をだせる。しかし、それでもコキュートスですら無理だった尻尾の破壊をできたのはかなり不思議だった。

ふと、自分の右手を見る。

そこに見えるのはいつもの見慣れた自分の右手。

冒険者家業を始めるようになって細かい傷こそ目立つようになったが、遠目から見れば傷一つなく美しいと言える右手。

(あれはきつと……)

かぶりを振る。今考えても仕方ないし、きつと意味がない。

なんとなく。なんとなくだがわかつてはいる。

ただ信じたくないだけだ。

「姫」

「ん？どうしたのハムスケ？」

森の賢王の声を聞き、考えを止める。

彼は見るからに困惑していた。

「この先にあるはずでござるんですが……何も気配を感じないでござる」

「気配がない？ただ感じ取れないだけじゃないの」

「いや……拙者これくらいの距離ならまずわかるはずなのですが……」

ムムム、と一人唸り始めた森の賢王。そして件の村は話の通り段々と姿を現す。

特に変な様子もなさそうだ。そう思ったラキユースだったが村に近づくにつれて、賢王の言うことの意味を理解することになった。

「……なに、これ」

村そのものには何の影響もなかった。

家が燃やされてるわけでもなく、井戸が埋められてるわけでもない。

しかし、その家の周りはひどいありさまだった。

地面には血が染み込み、肉を求めていたるところに蛆がわいている。

——それは虐殺の跡地だった。

「ぬうん？この村は襲われた後だったのでござったか？」

「……ッ！誰か！誰かいない!」

呑気にあたりを見回す賢王を無視して、ラキユースは剣を携え村を駆け巡る。

(無駄ダ。コノアリサマデ生き残りナドイルワケガナイ)

うるさいだまれ。そう言いたくても、声に出すことはない。

彼女は同居人の言葉を見殺しして、村中を探し回る。しかし……いや、予想通り生きている村人はいなかった。

ラクユースは自分の座る場所の死体を投げ捨てて、のんびりと昼寝をしていた賢王の元へと戻る。

「あつ、姫ーおかえりなさいでござる」

「ええ、ただいま」

「生き残りはいたでござるか?」

「……いえ、誰一人いなかったわ。居たとしても時間立ちすぎてるし今頃はエ・ランテルにいると思うわ」

「この後はどうするでござるか?」

「村からつづく道をたどってエ・ランテルまでいくわ」

家の中を見る限り、質のいい薬草を多く持っていたのがわかる。おそらくエ・ランテルに売りに行くための物。

であれば、馬車の轍をたどっていけば迷うことなく行けるだろう。

「そうでござるか。であれば拙者の上にもまた乗るでござるか?」

「ええ、願いますわ」

ラクユースは賢王の背中の上に飛び乗り、後ろを一回振り返って黙とうした後、前を向く。

(オイ)

「ん?」

(ヤケニ諦メガヨカッタガ、ココノコトヲ知ツテイタノカ?)

「……ええ。とつてもよく知っているわ」

薬草が取れる村。荒らされても家のものにほぼ手付かず。そして獣に食い荒らされた死体の山。

「ここはガゼフが死んだ村。カルネ村よ」

それから賢王の背に乗って数時間たった後、彼女らは遠くの方で堂々とそびえたつ城砦を目にする。

そこは最初から目的地にしていた城塞都市エ・ランテルだ。

「ありがと。もうあなたも住処に帰っていいわよ」

ラキユースは賢王の背中から降りる。

魔獣として登録するわけでもないのに、都市の中に連れていくことはさすがにできない。

太陽が沈んできてはいるが、森の賢王には向かって勝てるような存在はまずいないから、その面でも特に問題はないと言える。

森の賢王も少し寂しそうな顔を浮かべはしたものの、首を縦に振る。

「少し寂しいけどわかったでござる」

「道案内ありがとうね」

「役に立ててよかったでござる。それでは！」

森の賢王は機嫌よさそうに半ばまでしかない尻尾を左右に振りながら、地響きを鳴り響かせて森へと戻っていく。

それをちやんと遠くまで行くのを確認した後、エ・ランテルへ向けて歩き出す。

(黙ッテイタガ、コレカラドウスルノダ?)

「とりあえずはみんなと合流ね。持ち合わせは少しあるからそれを使って時間をつぶしてましょ」

(……ソノコトデハナクダナ)

「それだって私一人でやるよりみんなと一緒にやったほうがいいでしょ?」

(ダカラト言ツテ、無意味ニ時間ヲ浪費スルノカ?)

「あなたも折れないわねえ……じゃあエ・ランテルにいる間、最近何か変な出来事がなかったか探してあげる。これでいいでしょ?」

(ウム、マアソレデイイダロウ)

「まったくただ乗りしてる分際で生意気な……」

(ナニカ言ツタカ?)

「いーえ、なにも」

◆

夕焼けに染まる中、茜色の日差しを浴びながら一人の女性が歩いて

いた。

ジャラジャラと音を立てる些か露出度の高いビキニアーマーを装備した彼女は、人が一人入りそうなくらいに大きな袋を肩で担ぎながら墓地にポツンと立っている霊廟の中へと足を進める。その足取りには迷いが無い。何度も来慣れているのだろう。

「ふんふん」

上機嫌なのだろう。明らかに重そうな袋を持っているにもかかわらず、鼻歌を歌いながらスキップをして進んでいる。

本来であれば不謹慎だからやめろと言ってくるような、墓守がいてもおかしくはないがそんな者はだれもいない。

そうして歩いてみると、コツ、コツと杖を鳴らす音とともに一人の禿げた男性が現れた。男性の顔は青白く、今にも倒れそうだと思うくらいに肉もついていない。肉感的な体をしている彼女と対比させるような存在だった。

「――首尾は上々か？クレマンティーン」

「もつちろん！ほーら新鮮な男の子だよカジつちゃん！」

男――カジツトの言葉に女性――クレマンティーンは半月のような笑みとともに、肩で背負っていた袋を床へ置く。するとその中には、一人の少年が入っていた。

それを確認したカジツトは口元を緩ませる。

「こやつがそのタレント持ちか……」

「そだねー。あとはこいつに叡者の額冠を乗せれば――」

「ああ、必ずや目的が果たされるだろう」

ついに母をよみがえらせることができる。そうすればまた、何度も夢見たあの光景が見られる。

そう思うと、カジツトはにやけが止まらなかつた。

そんな様子を見て、クレマンティーンは嗤う。

「まあだろうね。街一つを死都へと変えられる儀式魔法“死の螺旋”。これが成功すればその宝珠もあるし、きつとアンデッドになれるだろうね」

「そうだ。あの程度の負のエネルギーなど街一つを沈めてしまえば確

保するのはたやすい!!」

クレマンティーヌはついに笑いをこらえきれなくなったのか、今までは小さく押し殺していた声が漏れ出した。

それを見て、カジットは顔をしかめる。

「……何がおかしい」

「ひ、ひ……いやあちよつとね」

ようやく落ち着いたのか、状態が戻る。

「あなたは自分の母のためにエ・ランテルに住んでいる人間を皆殺しにするのかなあつて」

「……当たり前だ」

「そおつか。自分のためではなく、あくまでお母さんのためにみんなを殺すんだあ」

「そうだ！それ以上言うのなら——!!」

「あー、もう言わない言わない。気を悪くしちゃった？ごめんねカジっちゃん」

両手を合わせて謝るクレマンティーヌに留飲を落としたのか、ため息を吐きながら光っている球体を再び懐へとしまう。

「……貴様に行動一つ一つに腹を立ててられぬ。ついてこい。もう準備を始める」

「はいー!」

クレマンティーヌは、先ほど降ろした少年を再び担ぎながら歩き始める。

少年はただうわ言のように、何かを呟いていた。

◆ 『それじゃあ、大丈夫なんだな?』

『ええ。だからなるべく早く来てね』

『わかった。ついでに依頼の準備も済ましておこう』

プツ、と途切れたような音とともにイビルアイとの会話を終わらせる。

メッセージ
伝言は使い勝手はいいけど高いのよねえとぼやきながら、ぼすんとベッドへ倒れこむ。

今と待っている宿は持ち金の関係上、いつもよりもワンランク下げた宿の中。そこで彼女は、イビルアイを通して自分の無事と持ち合わせも少ないからこつちに来てほしいと頼んでいた。

彼女の懐にある残金は金貨三枚。庶民がつつましく過ごしていればそれなりに持つ額だが、彼女の泊るような宿の場合節約しても数日で使い切ってしまう額だ。

いざとなったら一人で適当な依頼をこなす羽目になるかもしれない。そう若干あきらめをつけているラキユースだった。

(デ、大体何日程度デ合流デキルノダ?)

(そうね……急いできたとしても、3日くらいはかかるわね)

(随分掛カルナ。私タチハ一日デコレタデハナイカ)

(んなこと普通はできないわよ。馬だって疲れるし、魔法だって魔力を使い切ったら終わる。あなたみたいな疲れ知らずなんてそうはいないわよ)

事実、王都からここエ・ランテルまではかなりの距離がある。

今彼女は2日程度と言ったが、それは護衛を必要としないアダマンタイト級の冒険者だからこそだ。普通であれば、4日は最低でもかかるだろう。

だが、それをありがたがるように言っても絶対に納得しないことがわかりきっているので、彼女は特に何も言わない。

(フム……ナラバソノ間ニコノ町デ調べラレルダケの情報ヲ集メルゾ)

「別にそれやるのはいいけど明日からね、さすがに今日は疲れたからご飯食べて寝る」

(至高ノ御方々ニ謁見デキル時間ガ早マルカモ知レナイノダゾ?ソレデモ貴様ハソコデ寝テイルノカ)

「だれも探さないとは言っていないでしょ」

「ナラバ、私ガ変ワリニコノ体ヲ動カシテヤロウ」

(あ、こちら・やめなさい!どのみちこの時間——ってちよつと待って!?そんな恰好で外にでないでやめてえ!)

そうやってドアのほうまでコキュートスが動こうとしたとき、ドン

ドンとドアをたたく音が聞こえた。

その音はとても乱暴で、かなり急いでいるのが見て取れる。

「……ドウデモイイナ」

だがそんなのコキユートスには関係ない。そしてそれを無視して行く気満々でドアを開けようとするが、その動作の途中で無理やりラキユースが止めた。

「なわけないでしょー！いい加減に戻せー！」

乙女の尊厳を守るために、ラキユースは全力でコキユートスを追い返しつつ扉の向こうの人物に少し待つように告げ、目にもとまらぬはや着替えをしたのちドアを開く。

するとそこには珍しい人物がいた。

「……レイジー・バレアレさん？」

「ああそうじゃ」

体も小さく、全身皺まみれで白髪の老婆にしてエ・ランテル最高の薬師。レイジー・バレアレがまるで縋り付くような目線で、こちらを見ていた。

その様子を見てさすがにただ事ではないと確信したラキユースは、自分の部屋へと招き入れる。

「わるいのう……」

「いえ、これくらいいつものポジションのお礼だと思ってください」

「そういつてくれると鼻が高いね——それで、今回はお前さんに依頼をしたいのじゃ」

「依頼ですか？一体なにを？」

本来、依頼は冒険者ギルドを通すのがきまりだが、彼女はあえてそれを無視して内容を聞いていた。

その氣づかいに感謝しつつも、時間のないレイジー・バレアレはさっさと話を進める。

「ついさつき、店から少し離れた瞬間孫のンフィーレアが誘拐されたんじゃー！」

「誘拐……身代金狙いですか？」

相手は町一番の薬師。総資産は下手な貴族並みにあってもおかし

くない。

しかしレイジーは首を振る。

「いや、身代金の要求をするための書置きや地図がないのじゃ」

「なら逆恨み？」

「おそろくは……頼む！どうか孫を救ってくれ!!」

レイジーは地面に頭を擦り付けるようにして、ラクユースへ懇願する。

大切な孫を、大切な家族を、どうか救ってほしい。そんな思いで老婆は胸がいつぱいだった。

そんな懇願にラクユースは一も二もなく応える。

「わかりました。必ずあなたのお孫さんを救って見せましょう」

◆

「どうか、よろしく頼む」

「ええ、必ずや」

レイジーに、此方に頭を一度下げた後宿から出て行った。

それを確認した後、再び伝言メッセージを使い今此方へと向かってきているみんなへと話しかける。

その内容は、今回の依頼のこととそのためになるべく早く来てほしいということだった。

さすがにきついかもしれないとラクユースは思っていたが、青の薔薇の面々は二つ返事で了承してくれた。

馬を使いつぶすことになるだろうが、明日には到着するだろうという見立てらしい。

ラクユースはみんなに礼を言った後、宿の外へと歩きだす。今の時刻はちょうど日が落ちる寸前。

永続光が設置されていない場所などでは、すでに夜と変わらないくらいに暗くなっていた。

(探スト言ツテイタガ、ロケート・オブジエクト物体発見デモ使ウノカ?)

「なによそれ」

(第六階位ノ魔法ダ……ソレスラ使エナイノカ?)

「それすらって何よ。そもそも第六階位なんて使えるのなんてマジツ

クキヤスターでもそうはいないわよ」

「フツ、ナニヲ馬鹿ナコトヲ言ツテイル。オ前ノ仲間ダツテ第六階位
ヲツカツテタデハナイカ？」

「イビルアイは何度かコキユートスの前で第六階位であるテレポーター移を
使用している。

それを見ていた彼は、ゲート転移門を使用していないことからレベルが大し
てないことはわかってはいたが、第六階位程度なら普通に使うだろ
う。そう思っていた。

「ラキユースは少し目を泳がせた後、周りに聞かせたくないのか声に
出さずに話す。」

「彼女は200年以上生きているヴァンパイアなのよ。だから、第六
階位なんて高位魔法を使えるの」

「第六階位ガソンナ扱イナノカ？」

「少々レベルが低すぎるのではないだろうか？そう思うコキユート
スだが、言われてみればこれまでの行動からその程度のレベルでもお
かしくないことがわかってしまう。」

「あまりのレベルの低さにドン引きしているコキユートを無視し
て、ラキユースは突き進む。向かった先にあったのは、ポーシヨン屋
だ。看板にはバレアレ薬品店と書いてある。」

「彼女は、臆することなく扉を開けた。」

「その瞬間、鼻腔の中に血臭が飛び込んでくる。」

「――」

「思わず後ずさりしたくなるような匂いに、彼女は顔を顰めるも足を
止めずに、遺体の元へと突き進む。」

「遺体の数は全部で四つ。それらはすべてンファイレアを依頼で護
衛していた冒険者たちだ。」

「リイジー・バレアレから聞いた話によれば、漆黒の剣という名前の
チームらしい。銀級のチームを倒すことなど、ラキユースでもできる
が逃がそうとされてたであろうンファイレアを捕まえることは、彼女
でも難しい。」

「(今考えても無駄ね)」

ラキユースは頭を一度振ったあと、一度店の奥へ行つて蓄えとして保管してあつた黄金を少々拝借しながら死体の元へと戻ってくる。

(蘇生……貴様ノ実力カラ行クト死者復活辺リカ?)

「そうよ……ていうかあなたの知識の出所を知りたいわ」

(ナザリツクト言ツタダロウ? コレガ御方々ニ創造サレタカノ差ダ)

「はー……ほんと、羨ましくなるわー」

軽口をたたきながらも、手は休まず動く。

そうしてすぐに、魔法陣が出来上がる。

袋の中から、黄金を少量触媒として取り出す。生命力が、上位の冒険者に比べて低いからかその量は大した数ではない。

そして、まず一番リーダーっぽい顔をしていた人物を蘇生する。

「――死者復活」

そうすると、魔法が成功したのか今まで死亡していたはずの目の前の人物が目を覚ました。

「……………は?」

「目が覚めたようね。まずはあなたの名前を教えてくださいませんか?」

彼は惚けた顔をしてこちらを向き、その後目の前にいる人物がかの有名な青の薔薇のリーダーだと知り、ひと悶着あつたものすぐに落ち着き、質問に答えてくれた。

彼はペテル・モークと言い、漆黒の剣のリーダーで、先頭に立ったせいで真っ先に殺された人物らしい。

そして彼を殺し、ンファイアを強奪したものの名前はクレマンティーンといい、金髪で蛇のような眼光を持つ、露出度の高い鎧を着た女性らしい。

自分の知っていることをすべて話したペテルは、彼女に額を叩きつけるような勢いで土下座をした。

「たのむーみんなをせいでやってくれ!! かねならはらう。どんなにかかってもおれがかならずはらう……だから!!」

彼らに使う額がいくら少ないといっても、それはオリハルコンやアダマンタイト級の冒険者を蘇生するのに比べたら、という話だけで

銀級である彼に稼げる額では到底ないのは彼でもわかっている。

だが、それでも、彼はほかのみんなが生き返るのであれば、自らを犠牲にしてもいい。そう言っているのだ。

どう思ったのかは言うつもりはないのか、ラキュースは首を縦に振ることで答えを示し全員を蘇生させる。

幸い、ステイレットのような刺突武器で急所を一突きしているだけなので、蘇生不可能な傷ではなかった。だが、一対四、場合によっては五の戦場で正確に急所のみを突き、仕留めるその技量にラキュースは驚きを超えて感嘆していた。

そして時間が一秒でも惜しい彼女は、彼らからの感謝の言葉を早々に切り上げて全員から誘拐犯のクレマンティーヌについて情報をもらっていた。

その中で一つだけ、気になることを術スベルキャスター師ニニヤが言う。

「……風花聖典？」

「は、はい『さつきとこの子を使って風花聖典から逃げないとなあ』って、その……僕一人になった時に……」

「……そう、つらい事なのに教えてくれてありがとうね」

「い、いえ……その、役だったのならうれしいです」

「——風花聖典か……」

（ナンダソレハ？）

（法国……少し遠くにある人類至上主義の国に存在する特殊部隊の名前よ）

おそらくはどこかの特殊部隊から逃げてきたのだろう。それなら五対一でも負けない実力も納得できる。

しかし、なぜ彼をソフィーレアを誘拐したのだろうか？彼女にはそれがわからなかった。

「……ほかに何か言ってたことって何かある？」

「いえ……その、ごめんなさい」

「いや、無いのならいいの」

情報はここまでか。そう心の中で溜息を吐く。

下手人の名前と出身、そして大まかな強さを知れただけでも情報収

集能力が優れているわけではないラキユースにとっては、だいぶ上出来と言えるだろう。

しかし、まだ情報が足りない。何のために彼を誘拐したのか。それがわからない。

彼女の的には彼の持つタレントが目的だろうと思う。

だが、あくまで仮設であり断定はできなかつた。

だが、人も時間もないのが今の現状。リイジー・バレアレはギルドへこのことを伝えに行つたが、今はもう日が暮れており今すぐ対応のできる高ランクの冒険者は数が少ないのは自明の理。

なので、どうにかして情報を集めないことには何も始まらないのだ。

「みんなありがとう。あと、蘇生したばかりでつらいと思うけど冒険者ギルトへ行ってこのことを伝えてくれないかしら？」

「はい！任せてください!!」

「そう、ありがとね。ならこれ、受け取って」

「は、はい」

ペテルが受け取つたもの、それは二枚の紙。

一枚はラキユースの名前が入つた先ほどまでの情報をまとめたメモ用紙。

そしてもう一枚は名前以外書いていない白紙の依頼書だつた。

依頼主ラキユース。請負人ペテル。それ以外何も書いていない。

「……これに同意すればいいんですね？」

白紙の依頼書。それに同意をすれば、あとでどんな依頼をされようとも文句を言えない。

極端な話、トブの大森林で森の賢王の縄張りに行つてこいなど言うこともできるのだ。

本来なら突っぱねて当たり前の依頼書。しかし、宣言した手前彼はそれにサインをする。

「……これでいいですか？」

「ええ、ありがと。『情報提供』の依頼。無事に達成よ」

「……へ？」

「達成金は蘇生費に使っちゃったからないわ。ごめんね」

「“情報提供”の依頼……ですか」

「ええ。あなたたちの情報はとても役に立ったわ」

でも報酬は払えなくてごめんね？そう笑いながらラキユースは言う。

それに少し放心した後、ペテルは答えた。

「い、いえ……ありがとうございます!!」

「どういたしまして。それじゃ、私急いでるから」

そういうと、すぐにラキユースは離れていく。

ペテルはその後ろ姿をただずっと見つめていた。

5話

「うむ、確かに承った。衛兵たちにも私から伝えておこう」

プルトン・アインザックは羊皮紙を丸めて近くで待機させていた者に渡す。

「お願いします」

「いやいや、エ・ランテルの人間が誘拐されたとあれば協力するのは当たり前のことだ」

だから頭を下げないでくれとアインザックは手を振りながら朗らかに言う。

漆黒の剣の面々と離れた後、ラキユースは冒険者組合に来ていた。誘拐犯がンフリーリアを連れてエ・ランテルの外に逃げられてはたまらないから、それを防ぐためアインザックに協力を要請したのである。

本来は都市長であるパナソレイに話に行くのが一番なのだろうが、すぐに話を通せるほどのコネをラキユースは持っていない。故にそのコネを持つてるであろうアインザックに話を通したのだ。

アインザックとしても、街一番の薬師リイジーバレアレの孫が誘拐されたとなれば見逃せるわけがない。汚い話だがここで冒険者組合が力を貸したことで後々バレアレ薬品店から融通を聞かせてもらうこともできるだろう。そういう下心や打算を利用してお願いした。アインザックもそれをわかっているが、口に出す気などない公然の秘密だ。

ラキユースはこれが正しい選択だと思いながらも心の中では少しもやもやしていた。

(もしこれがティアやティナだったらすぐに見つけて解決してたのかな)

追跡能力に長けている彼女たちだったら、こんなことをしなくてもすぐに見つけて救出していただろう。それ比べて私は……。

(いけない。これは考えちゃダメなことね)

「どうかしたかな？」

「いえ、何も。それでは私もこれから動くので失礼します」
「ああ、こちらとしても全面的に協力をしようじゃないか。何かあったら伝えるよ」

頭の中の考えをリセットするように、アインザックとの話を切り上げて立とうとするが、軽いめまいが起こって少しその場でよろめいた。魔力の使いすぎだろう。さすがに蘇生魔法を4回使ったのは無理が祟ったようだ。

それを見たアインザックは心配そうにこちらを見てくるが、何かを言う前に——無理やり——立ち上がり何事もなかったように部屋を出た。

◆ ——ひんやりとした空気が肌を撫でる。

そこらへんに捨て置かれた簡素な椅子に腰を下ろし、目の前の墓荒らしをとらえるために作られた牢屋の中で膝を組み呆然としている少年の顔をただ何となく眺めていた。少年もこちらの目線に気づいたのか一度顔を上げたが、特に反応せずにそのままこちらを眺めてくる。

いや、本人的には眺めているという表現は正しくない。ただ顔を上げているだけに近いのだろう。その目は何かを映している様子はなく、本来の役割を果たしているとは思えない。

——つまらない。

それは私の少年への——ンファイレア・バレアレへの評価だった。こちらが何かしてもリアクション一つない。これではいじりがいがあるでない。元漆黒聖典としてこういうやつを意識を戻す方法を知らないわけではないが、それをやろうものならカジットとの決定的な決裂を意味する。さすがに面白さだけで死を選ぶほど愚かではない。「だけどつままないことには変わりないんだよねえ……」

死の螺旋を発動させるにはまだ下準備がかかるらしく、まだ時間はある。だから、適当に話でもして暇をつぶそうかと思っただが、これではまともな会話ができるかなんて火を見るより明らかだ。

でもだからと言って外に行って遊びに行くほどの時間はないらし

い。これをただつなぎ留めておくための嘘という可能性が無きにしても非ずだが、本当だった時を考えると少々帰ってくるのがめんどくさい。なので結局のところ外には出れないので、ここで時間をつぶさないといけないわけなのだ……。――

「エンリ……エンリ……」

会話をしようとしてもこれだ。

盛大に溜息をついた後、椅子を反転させ体の前面を椅子に押し付けつつひじを立てながら半目で話を振る。

「エンリ……」

「ねー、あなたそれしか言えないのー？」

「……」

「片思いがちよつと不幸な形で終わったただけでしょ？そんなくらい切り替えなよ」

それとも、もう行くところまで行つたの？

意地の悪い顔で煽るように言うが、それでも特に反応はない。

こちらのことを認識はしたようだが、目に理性らしきものが宿つたのはそれつきりで、再びぶつぶつと呟きながら自分の世界へと入っていく。

周りの様子など知らず、世界は自分を中心に回っている。そんな甘ったれたことでも考えていたのだろうか？ちよつとだけ優秀なタレントと魔法詠唱者の才能があつて家も金持ち。そして貧しくかわいいい彼女がいる。いずれか結婚することは目に見えている。そして店を継いで幸せなを家庭を作る。そんな暮らしがこれから続いているかと、何も起きることなくそうなると本気で思っていたのだろうか？「ほんつと、イライラする」

この甘ちゃんが。そういいながらこいつを感情のまま殺したい。いつまでも逃げてるんじゃないやねぞと逃げ回っているこいつに現実を教えてもつと苦しませたい。

結局のところ同族嫌悪なんだろう。こいつを見ているともしもの自分が見えてくる。

兄と比べられたときや、目の前であいつが殺されたとき、そして苛

められたとき。もしその時逃げだしていたらきつとこいつのようになつていたのだろう。そう、本能的にわかつてしまう。分かつてしまうからこそ殺意が沸くし、叩き潰してやりたくなる。

だからそう、このままこいつを――

「……はあ」

ゆつくりと手にかけていたステイレットを腰へと戻して、一回息を大きく吐いて考えをリセットし、頭を冷やす。

こんなことを思っても無駄なのだ。結局のところこいつは挫折してそのまま潰れた馬鹿で、私はそこから立ち上がって英雄の領域に足を踏み入れた超優秀な戦士だ。こいつとは全く違う。それにこいつを殺したところで、笑顔で殺されるこいつを見て後味の悪さだけが残るのは目に見えている。

「それは賢い判断だぞクレマンティーヌよ」

「フン、何？私がこいつを殺さないか見に来たわけ？」

「ああ、そうだとも。お前の目を見てるとこいつ殺すか気が気でない」
そういいながらカジツトは私と牢屋の間に3体のスケルトンを召喚した。どいつも雑魚だが鎧を着ていて、今手持ち武器では倒すのに少々時間がかかるのがわかる。見張り兼肉壁だろう。

「下準備は終わった。これから儀式へと取り掛かる」

「ずいぶん早かったね。予定だとまだ時間かかるんじゃないか？」

「この少年を誘拐するのに私も行く予定で話したからな。その分時間が短縮できた」

「ふーん、よかったねー」

「……まあいい。貴様も儀式の最中横やりが入らないよう、見張りをするのをわすれるなよ？」

「はいはい」

私が片手をあげて適当に返事を返すと、ただでさえ皺の多いカジツちゃんの顔に深い皺が刻まれる。煽ればあおるほど反応してくるからこの人モドキに比べたらよっぽど面白い。

それをわかつているカジツちゃんはそれ以上特に何も言い返すこ

とはなく、スケルトンに命じてンファイアを運ばせる。

「ねえねえ」

「なんだ？」

「あれに叡者の額冠を嵌めれば死の螺旋が発動するんだよね」

「そうだ。それにより私の目標への第一歩が踏み出せる」

「そだねー……まあ、がんば。何か目標があることはいいことだと思うよ」

「……フン」

カジツちゃんは何も言わずに出ていく。この後すぐに儀式を行うのだろう。

まあ私にはこれ以上のことは関係ない。ここで成功しようと失敗しようどどつちに転がろうと私にとってはいいい方向へ転がるには変わりないのだから。

だからこれ以上考えるのは不要だし侮辱だ。

私は用のなくなった椅子を蹴飛ばしながら立ち上がり、その場から立ち去った。

◆

冒険者組合で話を終えた後、バレアレ薬品店の先にある路地裏へと入っていた。すでに日が落ちていて薄暗い路地裏は散々なもので、ネズミやゴキブリといった生物が我が物顔で歩いている。普通の女性であれば躊躇しそうなものだがそこは手慣れたもの。冒険で慣れっこなので特に気にせず突き進む。

「こんなに昏いと何かが起きそうね」

(フン、ナニガ起キヨウト大シタコトデハナイダロウ)

「ま、まあそうだけど、雰囲気よ、雰囲気」

呆れたような声とともに理解ができないといわれる。彼女は少し顔を赤くしながら突き進む。すると横の道から急に大柄な男が飛び掛かってきた。どんな顔をしているのか、どんな気持ちで飛び掛かって来ているのか、そんなのは顔を見なくともわかる。

故に彼女はうろたえることなく、横から飛び掛かってきた男の脇腹めがけて回し蹴りをし、壁へと叩きつけた。

男はカハアと肺の中にあつた酸素を全て吐き出され、その場に倒れこみながら苦しそうな顔でこちらを見上げてくる。その顔には怒りではなく、何をされたのかまるでわかっていないといった困惑の感情で彩られていた。

ラクキュースは男にアダマタイトのプレートが見える位置までしゃがみ込みながら話しかける。

「ねえ、すこし聞きたいことがあるんだけどいいかしら?」

「よくもやってくれ……た……な」

男はやり返すために立ち上がるようにするが、その途中でラクキュースの鎧についているプレートを見てその勢いはたちまち消えていく。

彼女はそんな彼の態度など意にもせず、笑顔で質問をする。

「あなた、家はどこ?」

「……家なんてねえよ」

男はこちらを睨みつけながら、渋々といった感じで答える。

馬鹿にされてると思っっているのだろう。髭は伸ばし放題で、髪もぼさぼさ、そして着ている服もツギハギだらけと誰が見ても家を持てるようには見えない。

だが、お構いなしにラクキュースは質問を続ける。

「そう、ならいつもはどのあたりで寝泊まりをしているの?」

「この辺りだよ」

「今日の昼頃はどこら辺にいたの?」

「あ?いつも通りこの辺でゴミをあさってたよ」

悪いか。と男はガンをつけてくる。

いいえ、とラクキュースは言った後、一枚の人物絵を彼に見せた。

「こんな顔で露出の激しい鎧を着た女を見なかった?」

それを見た瞬間、男の顔色が変わった。

ビング、と彼女は心の中でほくそ笑み、男に詰め寄る。

「……知らない」

男が知らないと言い切ろうとした瞬間、横に置いてあつた樽が砕け散った。

派手な音を立てつつ砕けた樽は、中に入っていた腐った食材やそれ

を漁るねずみの中から出てくる。そして砕けた樽の一部が男の頬を
浅く裂いた。

男は悲鳴を上げながら後ろへ下がろうとするが、そこはすでに壁。
逃げ場などどこにもない。

「次知らないって言ったらあなたの腹を本気で蹴るわ」

ラクユースは這いつくばって逃げようとする男に視線を合わせな
がらやさしくお願いをした。

◆
だんだんと日の光が落ちてきたころ、彼女は6人目の男を開放して
次の方向へと歩いていった。

(……メンドクサイ)

「わかってるわよそんなの」

ラクユースは少しイラつきながら声に出して会話をする。

彼女がインフィーレアの搜索を始めてもうどれくらいたったか、彼女
はバレアレ薬品店を出てからずっとあの女の足取りをたどって路地
裏という路地裏を渡り歩いていた。

手がかりが見つからずに歩いていた、だったらまだここまで苛つか
ないだろう。手がかり自体は見つかる。巧妙に隠されていたりはす
るものの、しっかりと痕跡自体はある。だが、決定的な、というより
張本人のところにとどり着けないのだ。

相手も追跡をされていることを前提に動いているのだろうか、それ
にしてもここまで周到なのは今までの冒険者人生で初めてだと確信
できる。

だがティアとティナがいればもつと効率よく探せたんじゃないか
と思うと、彼女たちの能力の高さが少しだけうらやましく感じてしま
う。自分みたいにこんな非効率的なことをせずとも、彼女たちなら
もつと楽に足取りをたどれるだろう。そう、ラクユースは確信する。
(まあ、いないから仕方ないんだけどね)

ここで頭を振ってしつこく付きまとう考えをリセットする。

(ソレデ、コンナ事ヲ続ケテ本当ニ見ツカルノカ?)

「ええ。時間はかかったけど大まかな場所だったらわかったわ」

(ホウ?)

ラクユースはエ・ランテルの大まかな地図を広げる。

そこには先ほどまでの聞き込みを行った箇所マークが付けられていた。

「これを見る限り、相手はうまく逃げ回ってはいるけど全部をつなげてやると向かっている方角が見えてくるわ」

「素晴らしいながら地図の南にある大きな固まりへと丸を付けて、コキュートスに見せつけるように宣言する。」

「彼女が向かった先はエ・ランテルの共同墓地よ」

ラクユースが宣言した瞬間、轟音が響いた。

その音は凄まじく、音とともにこちらに振動が響くほどだ。

「え? な、なにになに!?!」

ラクユースは驚きながら路地裏から出て音の方向へと駆けだした。表を走っていると、さっきの彼女みたいに驚いて音の方向を向いて呆然とする人がかなり見える。

「一体なにがあつたのよ」

(音ノ出所的ニハ、先ホド示シテイタ方角カラダナ)

「……そうね」

(ナラバコレヲ追ツテイケバワカルノデハナイカ?)

「それは言われなくてもわかるわよ」

ラクユースは野次馬根性で近づこうとしている人を無理やり押しのけて前へ進む。

その時何人が転ばしてしまったことに罪悪感を覚えるも、緊急事態だからと自分に言い聞かせてごめんねと言ってさらに前へと突き進む。

そうして先へ走っていると段々共同墓地と市街地を分ける門が見えてきた。

そこで何があつたのか見るため近くにあつた木箱の上に乗る確かめたとき、思わずラクユースは絶句した。

「何、あのアンデットの数は」

城門は辛うじて残っているものの、今にも壊れそうな状態にされて

おり、中からは大量のアンデッドがあふれ出てきてたのだ。

ラキユースはそれを見るや否や、剣を抜き目の前の市民に襲い掛かろうとしていたスケルトンを砕く。

「あ、ありがとう」

「さあ、あなたは逃げてー!」

ラキユースは急いで立たせて市民を逃がしながら奥の城門で戦っている兵士たちのところへと向かう。

その途中で抑えきれなかったゾンビやスケルトンがいたものの、そんなのは物の数に入らない。キリネイラムの一振りで切り飛ばしていく。

(数は多いけど弱いのはつかりだからまだましね)

そうして門を超えてきたアンデッドをあらかた片付けたとき、門の方から悲鳴が聞こえる。

「集合する死体の巨人だあ!」
ネクロスウォーム・ジャイアント

半壊している門から覗く巨大な頭。兵士たちも槍で応戦しているものの、大した効き目があるようには思えない。それどころか下から這い上がってきたアンデッドが隙について襲ってきている分、逆効果にも見えてくる。

これでは門で防衛している兵士たちが全滅するのは時間の問題だろう。

だが、それは戦力がそれだけならの話だ。

ラキユースはその場から走り出しながら、自分の剣に宿る変わり者の相棒に声をかける。

「さあ行くわよ! 力を貸して」

(マア……イイダロウ)

彼女は一度目を閉じ、前傾姿勢を取った後に急加速。そうして目にもとまらぬ速さで門の前まで駆け寄りその場で跳躍。その信じられない脚力で門の上、兵士たちがいる場所へ着地する。

「え、あなたは!」

「蒼の薔薇の……!」

兵士の驚きの声が聞こえるが、そんなの彼はそもそも自分のことだ

と認識をしていない。

コキユートスはそのまま集合する死体の巨人の首へ斬りかかる。

「——ッ！」

コキユートスは一切の抵抗を感じることなく集合する死体ネクロスウオームジャイアントの巨人の首を斬る。それにより巨人の首からは腐った血が流れだすも、剣の長さに比べて首が大きすぎるせいが一撃では足りない。

(だめ、長さが足りない！)

「ソナノ知ッテイル」

だが、その程度わからない男ではない。

切り裂いた後、そのままコキユートスは巨人の肩に左手を突き刺すことで無理やり静止をする。

当然それを払おうとする手が襲い掛かってくるが、自分に当たりそうな部分だけを切り払うことで回避。そして指の喪失に驚き、巨人は体勢を崩した。

コキユートスはその瞬間を逃さずに斬りそこなった部分を切り払い、完全に首を切断する。

そうすることで完全に死に、そのまま後ろへ倒れこむ。

背中からは肉や骨がつぶれる鈍い音が響く。だが、ここで終わりではない。

コキユートスは剣を構え、魔力をまとわせ——そして開放する。

「風斬り——！」

振り払われた剣からは強烈な風と共に衝撃が響き渡り、周囲にいたアンデッドはすべて引きちぎられた。

まだ残ってはいるものの、量は先ほどに比べて劇的に減っている。

それを確認したのち、剣を鞘へ戻した。

「フム、マアコンナモノカ」

「す、すごい」

「あれがアダマンタイト級冒険者……」

(ありがと)

コキユートスと入れ替わり、ラキユースは袋から取り出した拡声の魔法のこもった宝石越しに話始める。

「みんな、私はこのまま奥にいつて原因を探ってくるからどうか耐えてて！」

「お、おお！」

「俺たちだつてやれる！」

「ああ、そうだ！俺たちだつてそれくらいやつて見せる！」

（随分トヤル気ガデテキルヨウダナ）

「ある程度はかたづけしたしね。さっきより量が減ってる分やる気が出たんでしょ」

（ソウイウコトカ）

ラキユースは宝石をしまいながら駆け出す。

（ソレデ、コノ後ハドコヘイクノダ？）

「決まってるでしょう、ソフィーレア君のところよ」